

河内長野市文化財調査報告書第43輯  
河内長野市埋蔵文化財調査報告書 XXIII

# 三日市北遺跡Ⅱ

2006年3月

河内長野市教育委員会

河内長野市文化財調査報告書第43輯  
河内長野埋蔵文化財調査報告書XXIII  
三日市北遺跡 II  
正誤表

頁	行	誤	正
2		河内長野市遺跡分布図(1/4000) (第50・51図、図版13・17)	河内長野市遺跡分布図(1/40000) (第50・51図、図版17)
38	22		
44	1	(第57・58図)	(第57図)

## 序 文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、豊かな自然に恵まれ、高野街道に代表される和歌山や奈良へ向かう街道の要衝として発展してきた街です。このため、市内には数多くの文化財が残されています。

この様な河内長野市も、大阪市内への通勤圏に位置しているため、住宅都市として発達してきました。この住宅開発がもたらした文化財や自然に対する影響は大きなものがあります。特に、地下に眠る埋蔵文化財は、開発と直接的に結び付く大きな問題です。

遺跡に託されている河内長野の先人達のメッセージである文化遺産を保護・保存し、現在の、さらには未来の市民へと伝えていくことは、現代に生きる私たちの責務であります。河内長野市に於いては、重要な課題である開発と文化財保護との調和のため、開発に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その把握に努めています。

本書は、発掘調査の成果を収録しています。皆様が先人達の残したメッセージの一部でもある文化財に対するご理解を深めて頂くと共に、文化財の保護・保存・研究するための資料として活用して頂ければ幸いです。

これらの発掘調査に協力して頂きました関係各位の埋蔵文化財への深いご理解に、末尾ながら謝意を表すものです。

平成18年3月

河内長野市教育委員会

教育長 福田弘行

## 例　　言

1. 本報告書は、平成16年度から平成17年度に行われた三日市町駅周辺整備事業に伴なう三日市北遺跡・三日市宿跡（M I N04-4・M I N04-12・M I N05-1）の発掘調査報告書である。
2. 平成16年度の調査は、河内長野市の委託を受けて河内長野市教育委員会の指導のもと河内長野市遺跡調査会が行った。平成17年度の調査については、河内長野市遺跡調査会の解散によって、河内長野市教育委員会が行った。
3. 調査にかかる費用は全額、国土交通省の補助を受けた河内長野市が負担した。
4. 発掘調査は、河内長野市教育委員会社会教育課参事尾谷雅彦、同文化財保護係太田宏明（M I N04-4・M I N04-12）、同嘱託職員小林和美（M I N05-1）を担当者として実施した。
5. 本書の執筆、編集作業は、小林が行なった。第1章第3節は太田が執筆した。
6. 测量作業は、富士測量株式会社（M I N04-4）、写測エンジニアリング株式会社（M I N04-12）、南紀航測株式会社（M I N05-1）に委託して行った。
7. 発掘調査及び内業整理については下記の方々の参加を得た。（敬称略、順不同）  
荒田恵、池田和江、大塚美幸、大西京子、大西美智子、喜多順子、小浜加奈子、斎田菜穂子、杉本裕子、武田隼希、田中由利、田瀬智子、中西和子、中野咲、服部恵子、羽場桃子、平野京美、平松由紀、廣瀬佑美、細川由紀子、桥本裕子、松尾和代、牟田口京子、森重香織、安間克巳、山田直子、湯浅敬子、横田明日香、柳光早矢香、渡辺今日子（現 和歌山県教育委員会）
8. 本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者が行い、遺物の写真は太田・小林が行った。
9. 本書で報告した記録類及び出土遺物は、河内長野市教育委員会が保管している。広く一般の方々に活用されることを望む。

## 凡 例

1. 調査は、國土座標VI系の座標軸に依拠している。また、本書で用いる北は座標北を示している。レベル高はT.P.を使用している。
2. 本書で使用した土層及び遺物の色調は、『新版標準土色帖』(2003年版)による。
3. 本書の造構名は下記の略記号を用いた。

S B…掘立柱建物 S D…溝 S I…竪穴住居 S K…土坑 S P…ピット  
P…柱穴 (S Bを構成するピット) S X…落ち込み
4. 造構実測図の縮尺は、1/10・1/20・1/30・1/40・1/50・1/60・1/125・1/250である。
5. 遺物実測図の縮尺は、土器1/4・石器2/3とした。
6. 弥生土器・土師器・土師質土器の断面は白抜き、須恵器・瓦器・瓦質土器・陶磁器の断面は黒塗り、瓦の断面は斜線である。
7. 遺物番号と写真図版の番号は一致する。
8. 文中の須恵器の編年は陶邑編年、瓦器塊の型式分類は尾上実氏の編年に基づくものである。

# 目 次

序 文

例 言

凡 例

目 次

挿図目次

表目次

図版目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 位置と環境.....	1
第2節 既往の調査.....	4
第3節 調査の経緯と経過.....	4
第2章 調査の結果.....	6
第1節 M I N04—4 .....	6
第2節 M I N04—12.....	12
第3節 M I N05—1 .....	27
第3章 まとめ.....	52

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図.....	1
第2図 河内長野市遺跡分布図 (1/40000) .....	2
第3図 調査区位置図 (1/5000).....	4
第4図 既往の調査区位置図 (1/10000) .....	5
第5図 遺構配置図 (1/100) .....	6
第6図 土層断面実測図 (1/50).....	7
第7図 S K 1・S K 5 遺構実測図 (1/20).....	9
第8図 S K 6・S X 1 遺構実測図 (1/40).....	10
第9図 S K 6・S X 1 出土遺物実測図.....	10
第10図 遺構配置図 (1/125) .....	12
第11図 土層断面実測図 (1/50).....	13・14
第12図 S B 1 遺構実測図 (1/60).....	15
第13図 S B 1 出土遺物実測図.....	16

第14図	S I 1 遺構実測図 (1/60).....	16
第15図	S K 7 遺構実測図 (1/30).....	17
第16図	S K 7 出土遺物実測図.....	17
第17図	S K 8 遺構実測図 (1/30).....	17
第18図	S K 8・9 出土遺物実測図.....	17
第19図	S K 9 遺構実測図 (1/30).....	18
第20図	S K 10 遺構実測図 (1/40).....	18
第21図	S K 10 出土遺物実測図.....	19
第22図	S K 11 遺構実測図 (1/40).....	20
第23図	S K 13 遺構実測図 (1/20).....	21
第24図	S K 13 出土遺物実測図.....	21
第25図	S K 12・14・15 遺構実測図 (1/20).....	22
第26図	S P 2・3・4・5・6・7 遺構実測図 (1/20).....	23
第27図	S P 8・9 遺構実測図 (1/20).....	24
第28図	S P 8 出土遺物実測図.....	24
第29図	包含層出土遺物実測図.....	25
第30図	遺構配置図 (1/250) .....	27
第31図	土層断面実測図 (1/50).....	29・30
第32図	S D 3・S K 17 遺構実測図 (1/20).....	28
第33図	S D 3・S K 17 出土遺物実測図.....	28
第34図	S D 4・S K 25 遺構実測図 (1/40).....	31
第35図	S D 4 出土遺物実測図.....	31
第36図	S K 18 遺構実測図 (1/20).....	32
第37図	S K 18 出土遺物実測図.....	32
第38図	S K 19 遺構実測図 (1/20).....	33
第39図	S K 19 出土遺物実測図.....	33
第40図	S K 20・22 遺構実測図 (1/20).....	34
第41図	S K 21 遺構実測図 (1/30).....	35
第42図	S K 20・21・22・24 出土遺物実測図.....	35
第43図	S K 26 遺構実測図 (1/40).....	36
第44図	S K 27 遺構実測図 (1/20).....	36
第45図	S K 26・27 出土遺物実測図.....	36
第46図	S P 11・12 遺構実測図 (1/20).....	37
第47図	S P 11・12 出土遺物実測図.....	38
第48図	S P 14 遺構実測図 (1/10).....	38

第49図	S P 14出土遺物実測図	38
第50図	S P 16・17・18・19・20・21造構実測図（1／20）	39
第51図	S P 16・17・18・19・20・21出土遺物実測図	39
第52図	S P 22造構実測図（1／10）	40
第53図	S P 22出土遺物実測図	40
第54図	S P 23造構実測図（1／10）	41
第55図	S P 24・25・26・28・29・30・31造構実測図（1／20）	42
第56図	S P 24・25・26・27・28・29・30・31出土遺物実測図	43
第57図	S P 32・33・34・35・36・37造構実測図（1／20）	45
第58図	S P 33・34・35・36・37出土遺物実測図	45
第59図	S P 38・41・42造構実測図（1／20）	46
第60図	S P 38・39・40・41・42出土遺物実測図	46
第61図	S P 43・44・45・46造構実測図（1／20）	47
第62図	S P 43・44・45・46出土遺物実測図	48
第63図	S X 2 遺物出土状況図（1／20）	49
第64図	S X 2 出土遺物実測図	49
第65図	包含層出土遺物実測図①	50
第66図	包含層出土遺物実測図②	50
第67図	土層断面実測図（1／50）	51
第68図	三日市北遺跡地形断面図（1／5000）	52
第69図	集落変遷模式図（1／20000）	53

## 表 目 次

第1表	河内長野市遺跡地名表	3
-----	------------	---

## 図 版 目 次

図版1	M I N04-4 全景（北から）、南部分（東から）
図版2	M I N04-4 S K 6（西から）、作業風景
図版3	M I N04-12 全景（北から）、S K 9（西から）
図版4	M I N04-12 S B 1内P 1（南から）、S P 2（西から）
図版5	M I N05-1 第1調査区 北部分（南から）、第1調査区 南部分（北から）
図版6	M I N05-1 第1調査区 北半部 柱穴群（北から）、S K21（西から）
図版7	M I N05-1 S K26（北から）、S P14（西から）

- 図版8 M I N05-1 S P22（上層）（東から）、S P22（中層）（東から）
- 図版9 M I N05-1 S P23（南から）、S X 2 遺物出土状況（北から）
- 図版10 M I N05-1 第2調査区 全景（西から）  
M I N04-4 遺物 S X 1 (2~13)
- 図版11 M I N04-12 遺物 S B 1 (16·14)、S K 8 (20·21)、S K 9 (22)、  
S K13 (33·35~37)  
S K10 (23~26·30~32)、包含層 (41·42·46·47·49)
- 図版12 M I N04-12 遺物 包含層 (50~56·59~61)  
M I N05-1 遺物 S P 8 (38·39)、S K17 (63)、S D 3 (64~68)、  
S D 4 (69~71)、S K18 (72~76)
- 図版13 M I N05-1 遺物 S K19 (77~85)、S K20 (86)、S K21 (87·88)、  
S K22 (89)、S K24 (90)  
S K26 (91~94)、S K27 (95)、S P11 (96·97)、  
S P12 (98·99)、S P14 (101)、S P17 (103)、  
S P18 (104)、S P19 (105·107)、S P20 (106)、  
S P21 (108·109)
- 図版14 M I N05-1 遺物 S P22 (112·113·115)、S P24 (116)、S P25 (117)、  
S P26 (118·119)、S P27 (120)、S P28 (121)、  
S P29 (122)、S P30 (123)、S P31 (124)  
S P33 (125·126)、S P34 (127)、S P35 (128)、  
S P36 (129)、S P37 (130)、S P38 (131)、S P39 (132)、  
S P40 (133)、S P41 (134)、S P43 (136)、  
S P44 (137·138)、S P45 (139·140)、S P46 (141)
- 図版15 M I N05-1 遺物 S X 2 (144)、包含層 (145~147·149~161·163~167)、  
包含層 (168~181)
- 図版16 M I N04-4 遺物 S K 6 (1)  
M I N04-12 遺物 S B 1 (15)、S K 7 (17~19)、S K10 (27~29)、  
S K13 (34)、S P 8 (40)、包含層 (43~45·48)
- 図版17 M I N04-12 遺物 包含層 (57·58)、S P14 (100)、S P16 (102)、  
M I N05-1 遺物 S P22 (100·111·114)、S P42 (135)、S P46 (142)、  
S X 2 (143)、包含層① (148·162)

# 第1章 はじめに

## 第1節 位置と環境

三日市北遺跡は河内長野市三日市町に所在する。

地理的環境としては金剛山地を水源とする天見川と石見川が合流する地点の石見川右岸、標高約130～140mにかけて位置する。河川の際であるが沖積地はあまり見られず、基本的に低位段丘から中位段丘上に立地し、東側には金剛山地から派生した標高約200mの丘陵が迫っている。

歴史的環境としては当遺跡に南接して石見川の左岸に旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である三日市遺跡が広がる。三日市遺跡では主な遺構として縄文時代中期の土坑、古墳時代中期の小型方墳や竪穴住居、掘立柱建物、古墳時代後期の横穴式石室をもつ古墳、中世の集落跡、近世の墓地や寺院跡、瓦窯などが検出されており各時代とも非常に内容が充実している。

また東側に迫る丘陵上には弥生時代後期の集落遺跡である大師山遺跡が広がり、大師山遺跡の西端には大師山古墳が立地する。大師山古墳は古墳時代前期に出現する全長50mの前方後円墳であり、内行花文鏡、管玉や鍬形石、車輪石などの石製品、刀子や鉄剣などの鉄製品、埴輪などが出土し、当地域の地域首長墓と考えられている。

北側に位置する烏帽子形山には古墳時代後期の烏帽子形古墳や文明12年（1480）に建立された烏帽子形八幡神社、また中世の城館として著名な烏帽子形城跡がある。烏帽子形城跡は文献にもしばしば登場するが、現在でも主郭跡や曲輪跡、土塁などの遺構がよく残っており、発掘調査においても主郭に相当する地点で礎石建物が検出されている。

当遺跡の南西、天見川の対岸には小塩遺跡・加塩遺跡・西浦遺跡など古墳時代から奈良時代の竪穴住居や掘立柱建物が検出され、天見川をのぞむ段丘縁辺部に集落が存在していたことが明らかになっている。

当遺跡の中央部には南北に高野街道が走り、三日市町駅周辺には宿場町として三日市宿が形成されていた。三日市宿跡の発掘調査においては多くの陶磁器とともに近世の建物跡や暗渠が検出されており、現存する建物とあわせて当時の宿場町の様子を彷彿とさせる。このように三日市北遺跡周辺は当市域において遺跡が最も密集し、人々と生活の営みが統けられてきたことがうかがえ、当市域の歴史を語る上で欠くことのできない地域である。



第1図 遺跡位置図



第2図 河内長野市道路分布図(1/4000)

番号	文化財名跡	種類	時代	番号	文化財名跡	種類	時代	
1	長野市神社遺跡	社寺	室町以降	(74)	萬葉第1章44年	城塁	平安以降	
2	再命寺遺跡	社寺	平安以降	(75)	聖尾	城壁	中世	
3	觀心寺遺跡	社寺	平安以降	(76)	大沢	城	城郭	
4	大師山内塙	古墳	古墳(前田)	(77)	三田山城	城	平安以降	
5	大師山古墳	古墳?	古墳(後田)	(78)	元清寺遺跡	社寺	中世以降	
6	大師山漢城跡	築造?	漢城(後田)・平安	(79)	御子城	城	城郭	
7	御宿寺遺跡	社寺	中世以降	(80)	雙井御守寺	社寺	中世	
8	鳥居形八幡神社遺跡	社寺	光明院	(81)	川上神社	社	中世以降	
9	聖尾穴占塙	古墳?	古墳(後田)・近世	(82)	大代田神社	遺跡	社寺	中世以降
10	長瀬空塙跡	空塙	平安~云長	(83)	向賀遺跡	跡	集落・生産	
11	小出田1号古墳	古墳	奈良	(84)	白野町遺跡	跡	散居地	
12	小出田2号古墳	古墳	奈良	(85)	上原北遺跡	跡	集落	
13	美令寺遺跡	社寺	平安以降	(86)	大日寺遺跡	社寺	古墳・漢墓	
14	天門山金剛院遺跡	社寺	平安以降	(87)	岩南古墳	跡	散居地	
15	日置香芝古墳	社寺?	光明院・平安~近世	(88)	小造造跡	跡	城塁	
16	施藏寺遺跡	社寺	中世以降	(89)	加佐通跡	跡	集落	
(17)	若瀬寺遺跡	社寺	平安以降	(90)	斯波遺跡	跡	古墳~中世	
18	五ノ木古墳	古墳	古墳(後田)	(91)	ジヨウノマニ遺跡	跡	城塁?	
19	西向塙跡	古墳	古墳(後田)	(92)	仁王山城跡	城	中世	
20	烏樹町城跡	城跡	中世~近世	(93)	タロウ城跡	城	中世	
21	秀多町遺跡	聚落	绳文~古墳~中世	(94)	安立城跡	城	城塁	
22	鳥居子古墳	古墳	古墳(後田)	(95)	土原近世瓦窯跡	生産	瓦窯	
23	大谷古墳跡	古墳	中世	(96)	吉町東古墳跡	散居地	城塁~中世	
24	佐谷古墳跡	散居地	鷹之大~近世	(97)	上田町遺跡	跡	生産	
25	武谷八幡神社	社寺	平安以降	(98)	毛越山城跡	跡	集落	
26	豊富町遺跡	散居地	中世	(99)	宮之山町遺跡	跡	散居地	
27	斐井山古墳跡	散居地	中世	(100)	野尻鬼塚古墳跡	跡	古墳	
28	足利北山遺跡	散居地	中世	(101)	野尻鬼塚跡	跡	散居地	
29	下平田町遺跡	社寺	中世	(102)	上田町遺跡	跡	散居地	
30	羽林高須寺遺跡	社寺	中世以降	(103)	原中野遺跡	跡	散居地	
31	清水寺遺跡	散居地	中世	(104)	小野坂遺跡	跡	古墳	
32	白井京庭山古墳	古墳	古墳(後田)	(105)	萬葉第1章7年	跡	城塁	
(33)	金村町遺跡	社寺	近世	(106)	黒野堂遺跡	跡	中世以降	
34	飛佐屋跡	聚落	近世	(107)	作道跡	跡	生産	
35	小村町御所遺跡	社寺	近世	(108)	赤光寺遺跡	跡	城塁~中世	
36	東の村御所遺跡	社寺	近世	(109)	鍋島遺跡	跡	散居地	
(37)	日の日殿古墳跡	社寺	近世	(110)	弘法山古墳跡	古墳	古墳	
38	水永作業跡	社寺	近世	(111)	山上山古墳跡	古墳	古墳	
39	尻尻作業跡	社寺	近世	(112)	西浦遺跡	跡	品鹽~中世~近世	
(40)	宮の下内堀跡	堆積	古墳	(113)	地蔵寺跡	跡	近世	
41	火山古墳	古墳	古墳	(114)	宮の下遺跡	跡	平安~中世	
42	山ノ山古墳	古墳	古墳(後田)	(115)	今町古墳跡	跡	散居地	
43	西代海跡	跡	飛鳥~飛良、江戸	(116)	町司遺跡	跡	近世~中世	
44	上原町塙跡	塙	近世	(117)	人町遺跡	跡	散居地	
45	佐伯寺跡	散居地・社寺	寛文~承化・後世	(118)	新町北遺跡	古墳	古墳	
46	第五山古墳跡	祭祀	中世~近世	(119)	西町西遺跡	跡	散居地	
47	争ケ池遺跡	散居地	绳文	(120)	東町南遺跡	跡	古墳	
48	上原遺跡	散居地	石器時代~近世	(121)	不阿東遺跡	跡	散居地	
49	住吉神社遺跡	社寺	近世以降	(122)	郡東城跡	跡	城塁	
50	高向神社遺跡	社寺	中世以降	(123)	今宮町東遺跡	跡	散居地	
51	曾根原宮寺遺跡	社寺	中世以降	(124)	沙の宮町東遺跡	跡	散居地	
52	曾根原宮寺跡	跡	寛文~承化	(125)	神ガ丘瓦世遺跡	跡	近世	
53	又子原古墳跡	古墳	内湯	(126)	物見福寺跡	跡	社寺	
54	子ノ元遺跡	散居地・社寺	鷹之大~古墳	(127)	三輪城遺跡	跡	中世~近世	
55	河合寺城跡	城跡	中世	(128)	松林寺遺跡	跡	近世以降	
56	日市町遺跡	集落・古墳跡	旧石器~近世	(129)	石井寺跡	跡	散居地	
57	日の谷城跡	城跡	中世	(130)	高森野町街遺跡	街遺	平安以降	
58	英小塙跡	散居地	绳文	(131)	西高森野町街遺跡	街遺	平安以降	
59	汐の山城跡	城跡	中世	(132)	高妻御塲跡	跡	平安以降	
60	峰山城跡	城跡	中世	(133)	上原東遺跡	跡	散居地	
61	板谷山城跡	城跡	中世	(134)	施設寺東方遺跡	跡	施設・埋食	
62	国見城跡	城跡	中世	(135)	宇多町北遺跡	跡	散居地	
63	猪塙跡	城跡	中世	(136)	下平町薄野跡	跡	古墳~中世	
64	猪塙跡	城跡	中世	(137)	あかしらむ遺跡	跡	散居地	
(65)	火神社遺跡	社寺	中世以降	(138)	新町北遺跡	跡	古墳	
(66)	名威第1・5・6保	祭祀	平安以降	(139)	高瀬京位墓跡	跡	近世	
67	伏見川神社遺跡	社寺	中世以降	(140)	伏見町東遺跡	跡	散居地・地盤	
68	灰中金遺跡	社寺	近世以降	(141)	三日山北遺跡	跡	绳文~弘法~中世	
69	石仏跡	城跡	中世	(142)	二日市宿跡	跡	駅前に伴う街並	
70	佐久城跡	城跡	中世	(143)	上田町堀留跡	跡	中世~近世	
71	猪塙城跡	城跡	中世	(144)	浅川町遺跡	跡	駅前~中世	
72	若城第1・6・8保	祭祀	平安以降	(145)	太田町北遺跡	跡	散居地	
(73)	若城第1・8保	祭祀	平安以降	(146)	太白源跡	跡	散居地	

( ) = 地図範囲外 \* = 街道につき地図上にはプロットせず

第1表 河内長野市道路地名表

## 第2節 既往の調査

三日市北遺跡は南海電鉄高野線の三日市町駅前再開発事業に伴う確認調査によって新たに発見された。平成13年から平成17年にかけて実施された本調査では、調査面積が13,000m<sup>2</sup>を超え、弥生時代～近世にかけての複合遺跡であることが判明した。

弥生時代の成果としては、竪穴住居31棟、掘立柱建物4棟や環濠と考えられる溝が検出され、弥生時代中期後半を中心とする環濠集落の存在が明らかとなった。

また同一面で検出された近世の建物や石組みの暗渠などは旧三日市宿跡とみられ、三日市北遺跡とは区別して「三日市宿跡」として新たに認識されることとなった。

このように三日市町駅西側は大規模な発掘調査が実施され多くの知見を得たが、駅東側は調査件数が少なく、その様相については不明な点が多い。だが、石見川南岸の三日市遺跡では昭和60年から昭和62年にかけて宅地開発に伴ない広範囲の発掘調査が実施された結果、旧石器から江戸時代にかけて非常に多くの遺構・遺物が検出されている。

その後は小規模な調査が続けられているが、今回の調査地に近いM I C96-4調査区では、弥生時代後期や古墳時代、中世の土器が出土している。

## 第3節 調査の経緯と経過

当該発掘調査は、河内長野市（担当、三日市町駅前再開発事務局）を事業主体とする三日市青葉台線の整備事業（以下「事業」という）に伴う事前調査である。

平成11年度に、河内長野市三日市町駅前再開発事務局（以下、「市」という）より、河内長野市教育委員会（以下市教委という）へ事業地当該事業の埋蔵文化財の取扱いについて照会があった。

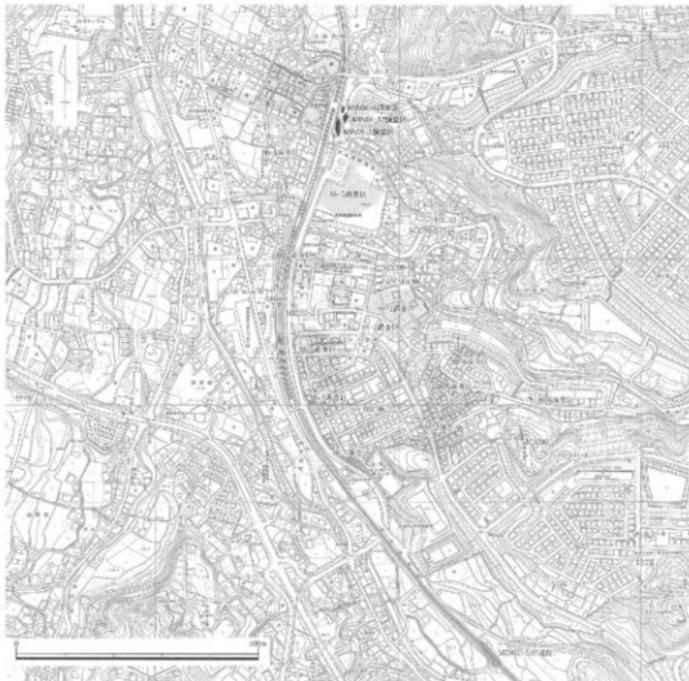


第3図 調査区位置図(1/5000)

この際、事業地が周知の埋蔵文化財包蔵地である高野街道・三日市北遺跡の範囲に該当するため、この場所については、発掘調査を実施する必要があることを伝えた。また、文化財保護法第57条の3の発掘通知を市教委へ提出することを求めた。

この後、平成12年1月19日付けで、通知の提出があり、市教委では、平成12年2月14日付けで、大阪府教育委員会へ進達を行った。この結果、大阪府から工事施行前に発掘調査を実施するようにとの指導があった。この指導に基づき、発掘調査依頼書を市教委の外郭団体である河内長野市遺跡調査会（以下調査会という）へ提出することを求めた。

その後、平成17年1月12日付けで、調査会へ発掘調査依頼書の提出があり、市教委の指導の下、市は調査会との契約書の締結を行なった。発掘調査は、平成16年7月16日～平成16年8月31日と平成17年1月13日～平成17年3月18日の2回にわけて行なわれた。また、約800m<sup>2</sup>が用地買収と地上構造物撤去の遅れから、平成17年5月10日～平成17年6月21日に、また、調査会の解散に伴ない市教委が行なった。内業整理については平成17年度に市教委が行ない、平成18年3月10日で、埋蔵文化財記録保存にかかるすべての調査を完了した。

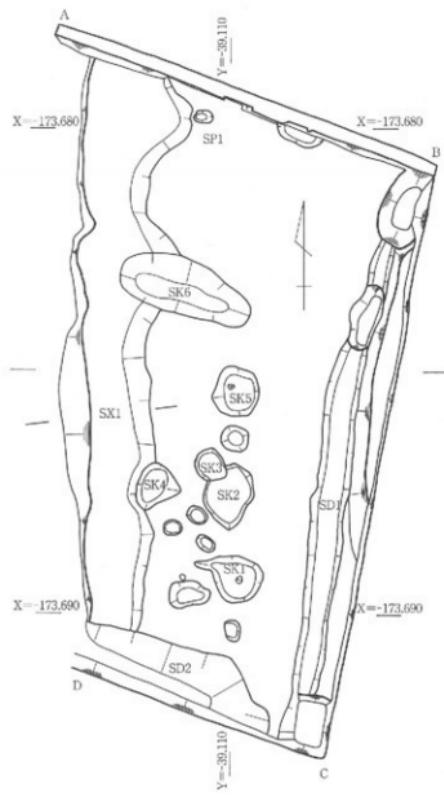


第4図 既往の調査区位置図(1/10000)

## 第2章 調査の結果

### 第1節 MIN04-4

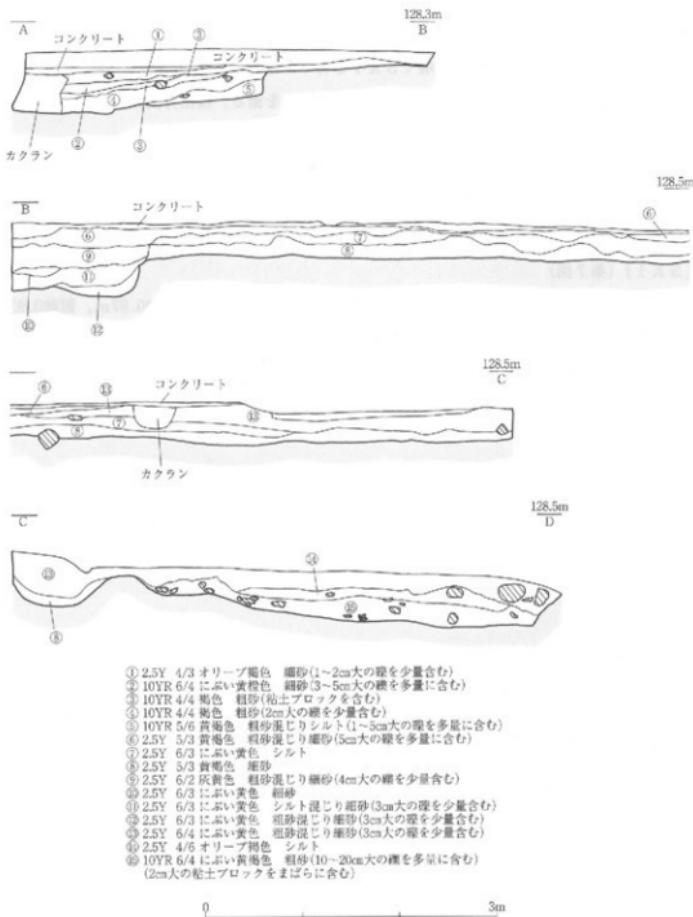
本調査区は東側の丘陵と西側の三日市町駅舎にはさまれた丘陵裾部の狭小な平坦面に位置する。調査区は長辺12m、短辺7mで設定した。調査の方法は近代の盛土、旧耕土、旧床上を機械掘削し、中近世及び古墳時代の遺物包含層を人力掘削した。遺構面は地山上面



第5図 遺構配置図(1/100)

で検出した。

基本層序は地表面から G L - 0.25m までは褐灰色粗砂混じり粘土層（旧耕土）、G L - 0.25~0.30m までは黄褐色粗砂混じり粘土層（旧床土）、G L - 0.30~0.35m までは褐灰色シルト層（堆積土）、G L - 0.35~0.50m までは褐灰色粘土層（遺物包含層）、G L - 0.50~0.55m までは灰白色シルト層（遺物包含層）、G L - 0.55m からはにぶい黄橙色粘土層（地山）の順で堆積していた。



第6図 土層断面実測図(1/50)

## (1) 溝

### [S D 1]

調査区の東側で検出されたが両端は調査区外へと続く。遺構の規模は検出長9.25m、幅0.60m、深さ0.11mを測る。検出方向はN—10°—Eであり、やや弧状を呈する。古墳の周溝の可能性もあるが、調査を行ったのが一部であるため詳細は不明である。

遺物は土師器、須恵器、土師質羽釜が出土したが、細片のため図化できなかった。

### [S D 2]

調査区の南端で検出された。西端でS X 1を切り、西側と南側は調査区外へと続く。遺構の規模は検出長4.25m、検出幅0.60m、深さ0.40mを測る。検出方向はN—68°—Wである。

遺物は瓦質甕、土師質羽釜、陶器甕が出土したが、細片のため図化できなかった。

## (2) 土坑

### [S K 1] (第7図)

調査区の南側で検出された。遺構の平面形は不定円形で、規模は長軸0.97m、短軸0.93m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN—10°—Eである。

遺物は出土しなかった。

### [S K 2]

調査区の中央部南寄りで検出された。遺構の平面形は不定円形で、規模は長軸1.35m、短軸1.02m、深さ0.06mを測る。主軸方向はN—3°—Eである。北西隅はS K 3に切られている。

遺物は陶器甕が出土したが、細片のため図化できなかった。

### [S K 3]

調査区の中央部南寄りで検出された。遺構の平面形は不定円形で、規模は長軸0.72m、短軸0.58m、深さ0.03mを測る。主軸方向はN—19°—Eである。南東隅でS K 2を切っている。

遺物は出土しなかった。

### [S K 4]

調査区の中央部南寄り、S X 1の肩部で検出された。遺構の平面形は不定円形で、規模は長軸0.98m、短軸0.86m、深さ0.18mを測る。主軸方向はN—12°—Eである。

遺物は磁器が出土したが、細片のため図化できなかった。

[SK 5] (第7図)

調査区の中央部で検出された。遺構の平面形は隅丸方形で、規模は長軸0.99m、短軸0.90m、深さ0.09mを測る。主軸方向はN-15°-Eである。

遺物は出土しなかった。

[SK 6] (第8・9図、図版2・16)

調査区の中央部で検出された。遺構の平面形は梢円形で、規模は長軸2.75m、短軸1.15m、深さ0.37mを測り、SK 1を切っている。主軸方向はN-77°-Wである。

遺物は須恵器壺身(1)、瓦器、土師質土器が出土した。須恵器壺身(1)はたちあがりが短く内傾し、底部にのみ回転ヘラケズリが行なわれることから陶邑編年II型式4段階に相当すると思われる。

(3) 柱穴

[SP 1]

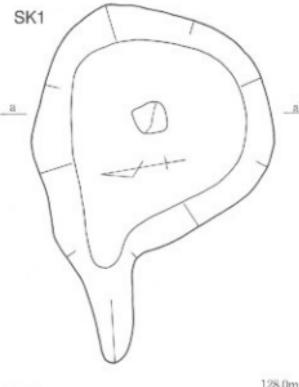
調査区の北端、SK 1の肩部で検出された。遺構の平面形は梢円形で、規模は長軸0.39m、短軸0.26m、深さ0.15mを測る。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

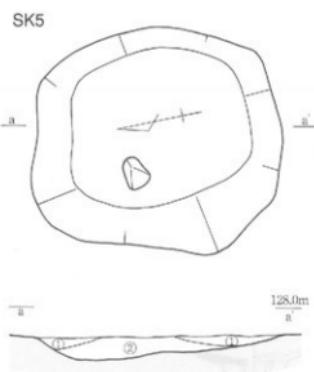
(4) その他

[SX 1] (第8・9図、図版10・16)

調査区の西側で検出された。南端はSD 2に切られ、北側と東側は調査区外へと続くため、詳細は不明である。遺構の規模は検出長11.50m、幅1.10



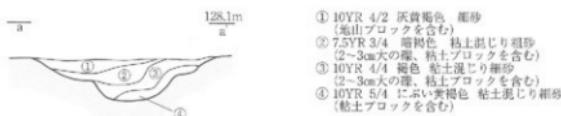
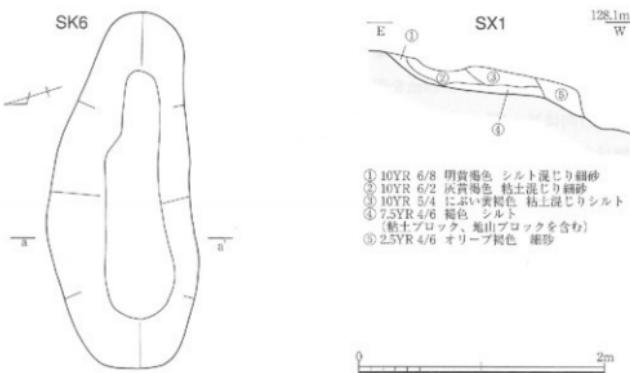
① 2.5Y 6/2 黄褐色 細砂



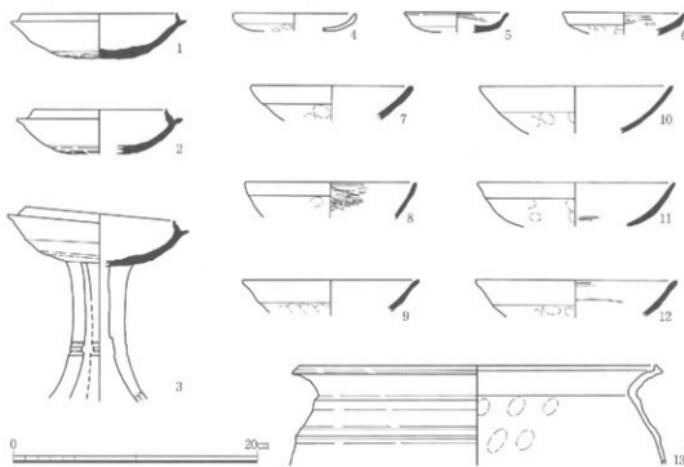
① 2.5Y 4/4 オリーブ褐色 シルト  
② 10YR 6/4 にぶい黄褐色 粗砂(4~5cm大の塊を含む)

0 1m

第7図 SK 1・SK 5 遺構実測図(1/20)



第8図 SK6・SX1遺構実測図(1/40)



第9図 SK6・SX1出土遺物実測図

m、深さ0.70mを測る。

遺物は須恵器坏身（2）、須恵器有蓋高坏（3）、土師質皿（4）、瓦器皿（5・6）、瓦器塊（7～12）、土師質羽釜（13）のほか、土師器、東播系須恵器練鉢、瓦質土器、サヌカイト剥片が出土した。須恵器坏身（2）は（1）と同様に底部にのみ回転ヘラケズリが行われ、須恵器有蓋高坏（3）は基部の細い外反する脚部を貼付することから陶邑編年II型式4段階に相当すると思われる。瓦器塊（7～12）はいずれも口縁部のみの細片であるが、外面上半部に強いヨコナデを施し、下半部はユビオサエの跡が見られる。内面は（8）のみヘラミガキを密に施すが、その他は粗雑であることから尾上編年III－2～3期に相当すると思われる。

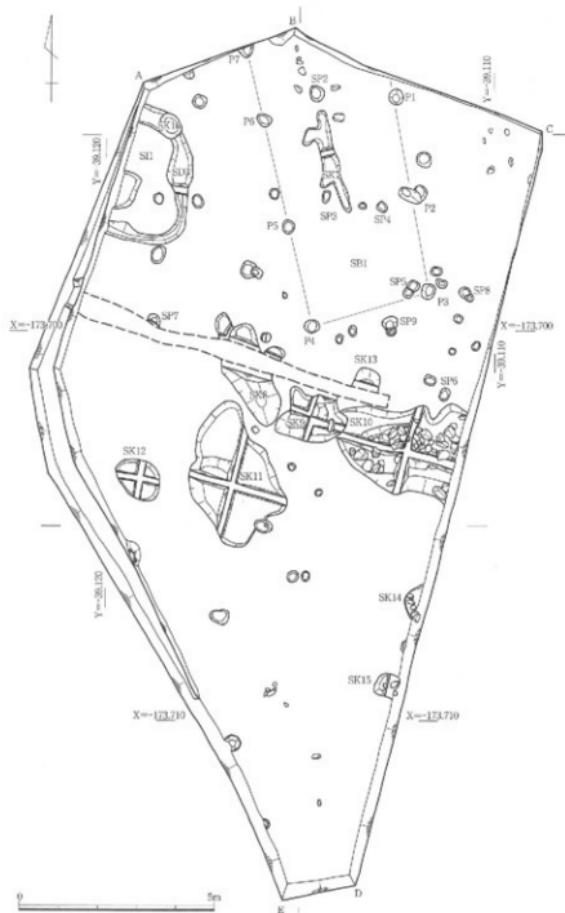
#### （5）包含層

包含層からは瓦器、瓦質土器、陶磁器が出土したが、細片のため図化できなかった。

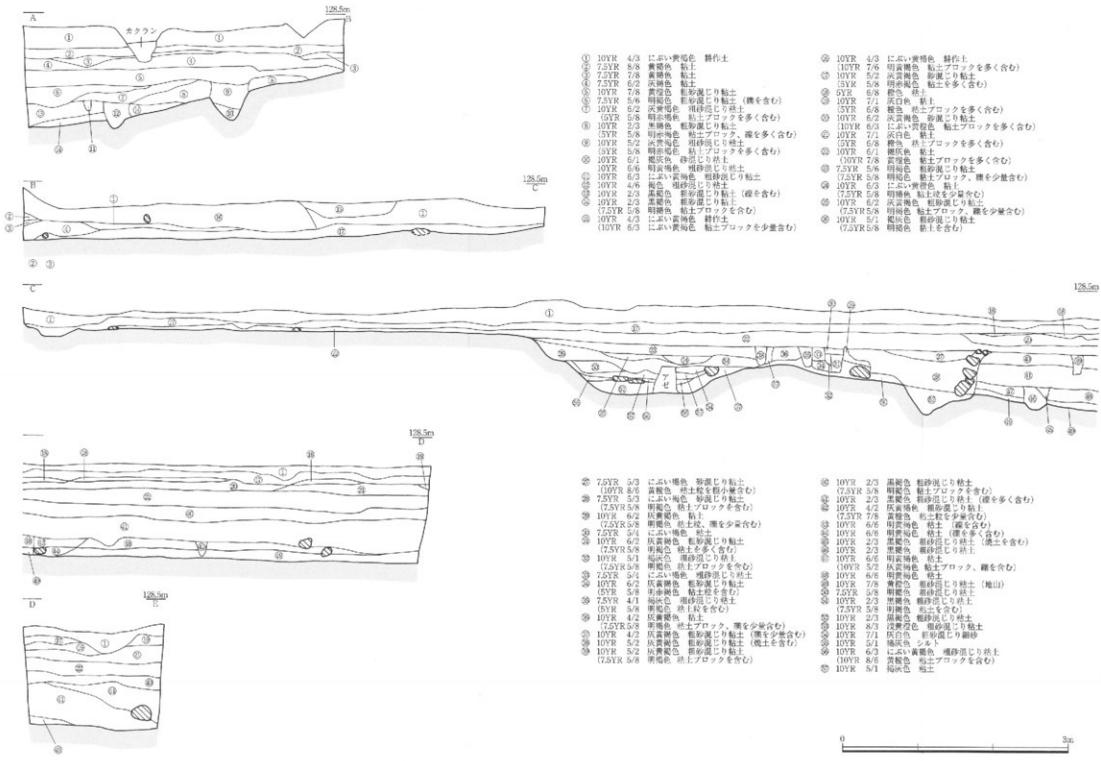
## 第2節 M I N04-12

本調査区はM I N04-4 調査区の南東に接し、丘陵裾部の同じ平坦面に位置する。

調査区は長辺21m、短辺11mで設定した。調査の方法は近代の盛土、旧耕土、旧床土を機械掘削し、中近世及び古墳時代の遺物包含層を人力掘削した。遺構面は地山上面で検出した。なおSK10付近は谷状地形をなしている。この場所から採取した埋土は微細物分析を行っており、分析結果は『三日市北遺跡I』で報告している。



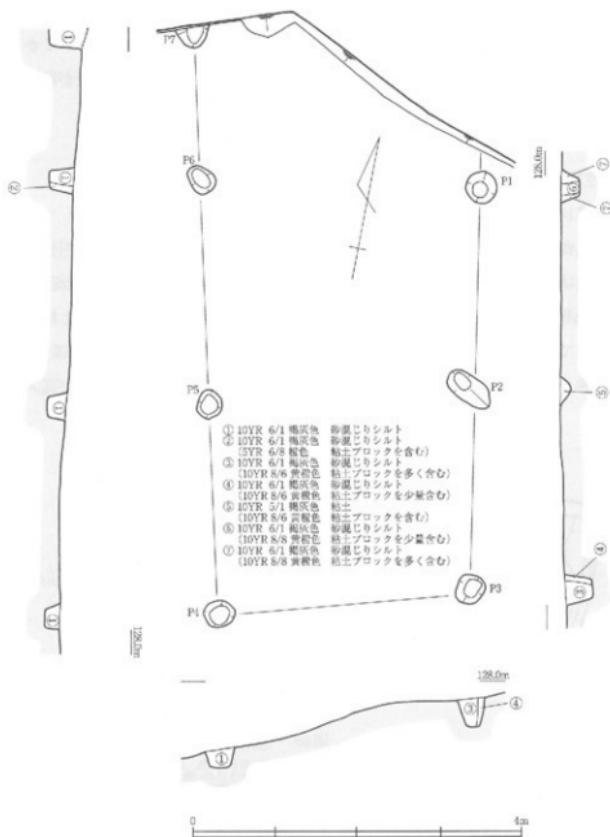
第10図 遺構配置図(1/125)



第11図 土層断面実測図(1/50)

基本層序は地表面から G L - 0.10m までは褐灰色粗砂混じり粘土層（旧耕土）、G L - 0.10～-0.20m までは黄褐色粗砂混じり粘土層（旧床土）、G L - 0.20～-0.40m までは褐灰色シルト層（堆積土）、G L - 0.40～-0.60m までは褐灰色粘土層（遺物包含層）、G L - 0.60～-0.85m までは灰白色シルト層（遺物包含層）、G L - 0.85～-1.05m まではにぶい黄橙色粘土層（地山）の順で堆積していた。

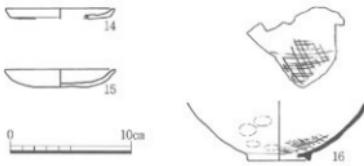
### (1) 捶打柱建物



第12図 S B 1 遷構実測図(1/60)

[S B 1] (第12・13図、図版4・11・16)

調査区の北側で検出された。柱穴の掘形の平面形はほぼ円形である。検出した建物の規模は桁行3間以上(7.20m)×梁間1間(3.35m)である。柱間は桁行2.00~2.65m、柱穴の掘形の径0.30~0.40m、深さ0.18~0.36mを測る。建物の南北方向はN-15°-Wである。



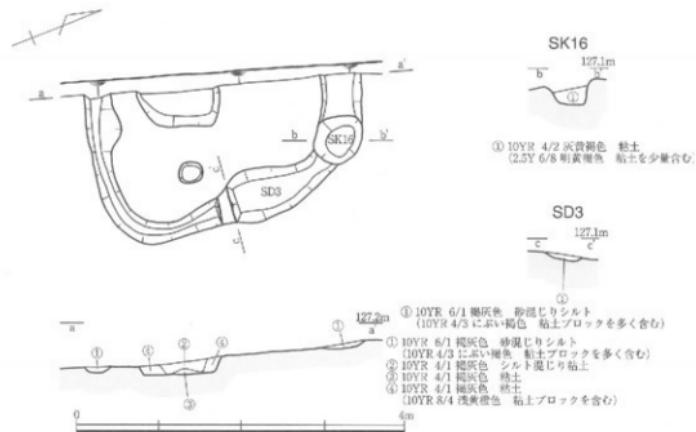
第13図 SB 1出土遺物実測図

遺物はP1から土師質皿(14・15)、瓦器塊、P2から土師質土器、瓦器塊、P3から土師質土器、瓦器塊、P5から瓦器皿、P6から瓦器塊(16)、土師質土器、P7から瓦質甕が出土した。瓦器塊(16)は見込みに格子状暗文を施し、断面方形の高台が貼り付けられている。尾上編年III-2期に相当すると思われる。

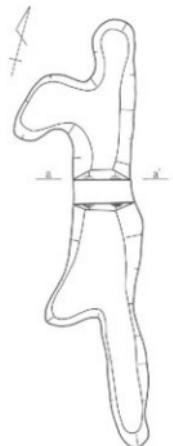
## (2) 壺穴住居

[S I 1] (第14図)

調査区の北西隅で東半部のみ検出され、西側は調査区外へと続く。平面形は円形を呈しており、規模は直径約3.5mと推定される。全体的に削平されているため遺存状況は悪く、床面から10cm程度残すのみであった。床面の直径は、約2.5mであり、壁溝、土坑、ピットが検出されているが、炉や排水溝は検出されていない。壁溝は幅約0.50m、深さ約0.1mで、長さ約5mにわたり検出した。壁溝からは土師器の細片が出土しているが混入と考



第14図 SI 1遺構実測図(1/60)

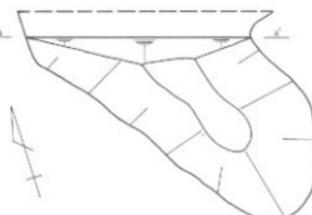


① 10YR 6/1 緩灰色 粉混じシルト  
0 1m

第15図 SK 7 遺構実測図(1/30)



- ② 10YR 6/4 に近い黄褐色 相応混じり粘土
- ③ 10YR 6/4 に近い黄褐色 粘砂混じり粘土  
(DOYR 6/5 黄褐色 料をブロックを含む)
- ④ 10YR 6/1 黄褐色 相応混じり粘土  
(DOYR 6/5 黄褐色 ブロックを含む)
- ⑤ 10YR 6/1 黄褐色 シルト
- ⑥ 10YR 6/8 黄褐色 粘土ブロックを含む
- ⑦ 10YR 6/1 黄褐色 シルト
- ⑧ 10YR 6/4 に近い黄褐色 シルト
- ⑨ 10YR 6/1 黄褐色 シルト
- ⑩ 10YR 6/8 黄褐色 粘土ブロックを含む
- ⑪ 10YR 6/1 黄褐色 シルト



第16図 SK 7 出土遺物実測図



第18図 SK 8・9 出土遺物実測図

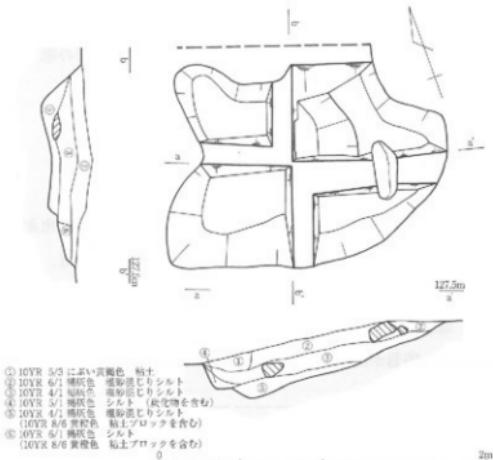
えられる。上坑、ピットはいずれも浅く遺物が出土していないため、S I 1に伴うものか不明である。検出面の標高は126.7mであった。

### (3) 土坑

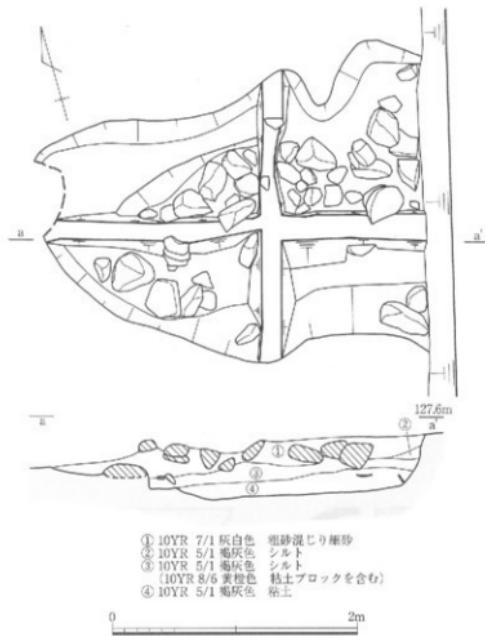
[SK 7] (第15・16図、図版16)

調査区の北側中央部で検出された。遺構の平面形は南北に伸びる溝状を呈し、規模は長軸0.30m、短軸0.22m、深さ0.20mを測る。主軸方向はN-14°-Wである。

遺物は土師質皿(17・18)、瓦器塊(19)、弥生土器甕、瓦器皿、陶器が出土した。瓦器塊(19)は内面には粗雑な螺旋状



第19図 SK 9 遺構実測図(1/30)



第20図 SK 10 遺構実測図(1/40)

暗文を施し、外面にはユビオサエの跡が顕著に見られる。器壁は厚く、高台は全く見られない。尾上編年IV-3期に相当すると思われる。

〔SK 8〕(第17・18図、図版11)

調査区の中央部で検出された。北側は攪乱に切られ遺構の平面形は不明である。規模は長軸1.36m、短軸1.08m、深さ0.52mを測る。主軸方向はN-72°-Wである。

遺物は須恵器坏蓋(20)、瓦器塊(21)、上部質土器が出土した。須恵器坏蓋(20)の天井は比較的低く丸みを持ち、天井と口縁の境にはわずかに稜をもつ。天井外面に回転ヘラケズリを行ない、陶邑編年II型式3段階に相当すると思われる。

〔SK 9〕(第18・19図、図版3・11)

調査区の中央部、SK 8の東で検出され、SK 10を切る。遺構の平面形は不定形で、規模は長軸

1.52m、短軸1.15m、深さ0.30mを測る。主軸方向はN—20°—Eである。

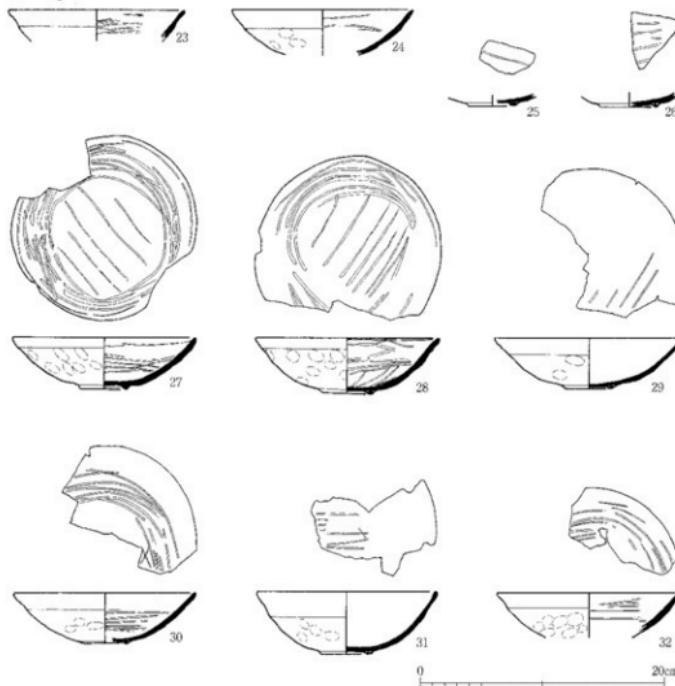
遺物は須恵器坏身（22）、土師器、瓦器塊、瓦器皿が出土した。須恵器坏身（22）はたちあがりが短く内傾し、受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさまる。

[SK10]（第20・21図、図版11・16）

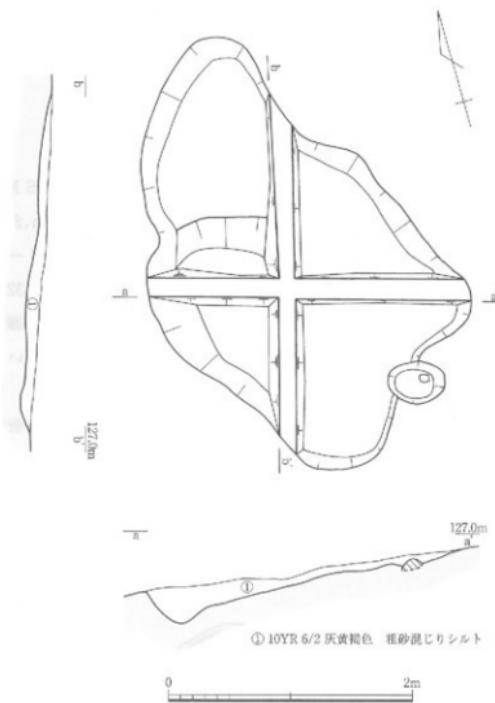
調査区の中央部東端で検出されたが、東側は調査区外へ延び、西側はSK9に切られているため、遺構の平面形は不明である。規模は残存長軸3.10m、短軸2.30m、深さ0.45mを測る。遺構の内部からは5~30cm大の石が多数出土した。主軸方向はN—71°—Wである。

遺物は瓦器塊（23~32）、瓦器皿、須恵器甕が出土した。瓦器塊（23~32）は内面に粗雑な暗文と見込みに平行線状暗文を施す。外面には口縁部にヨコナデ、口縁下半部にユビオサエの跡が顕著に見られ、底部には断面逆三角形の高台を貼り付けている。尾上編年Ⅲ~Ⅳ期に相当すると思われる。

なおSK10の埋土は微細物分析を行っており、「三日市北遺跡Ⅰ」で分析結果を報告している。



第21図 SK10出土遺物実測図



第22図 SK 111遺構実測図(1/40)

[SK 11] (第22図)

調査区の中央部で検出された。遺構の平面形は不定形で、規模は長軸2.82m、短軸2.68m、深さ0.17mを測る。主軸方向はN—13°—Eである。

遺物は出土しなかった。

[SK 12] (第25図)

調査区の南西部で検出された。遺構の平面形は梢円形で、規模は長軸1.16m、短軸0.94m、深さ0.08mを測る。主軸方向はN—80°—Wである。

遺物は出土しなかった。

[SK 13] (第23・24図、図版11・16)

調査区の中央部東寄り、SK 10の北側で検出されたが、南半分が擾乱で切られているた

め詳細は不明である。遺構の規模は長軸0.68m、残存短軸0.39m、深さ0.52mを測る。主軸方向はN—74°—Wである。

遺物は土師質皿（33）、瓦器塊（34～37）、瓦質甕が出土した。土師質皿（33）は内面にナデの後、ハメケを施す。瓦器塊（34）は内面には粗雑な螺旋状暗文を施し、器壁は厚く、高台は全く見られない。瓦器塊（36）は内面には暗文を施さず、外面にはユビオサエの跡がわずかに見られる。高台は見られず、平底を呈する。尾上編年IV—3期に相当すると思われる。

#### 〔S K14〕（第25図）

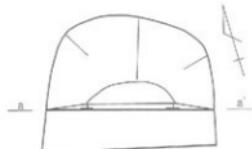
調査区の東端で検出された。調査区外に広がるため、平面形は不明だが、残存長軸0.45m、残存短軸0.16m、深さ0.17mを測る。遺構内部からは20cm大の石が多数出土した。主軸方向はN—17°—Eである。

遺物は瓦器塊、土師質羽釜が出上したが、細片のため図化できなかった。

#### 〔S K15〕（第25図）

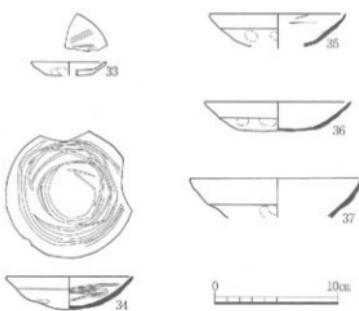
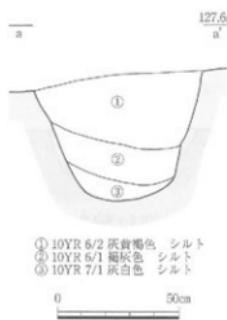
調査区の東端、S K14の南で検出された。調査区外に広がるため、平面形は不明だが、長軸0.60m、残存短軸0.32m、深さ0.18mを測る。遺構内部からは15cm大の石がまとまって出土した。主軸方向はN—15°—Eである。

遺物は出土しなかった。



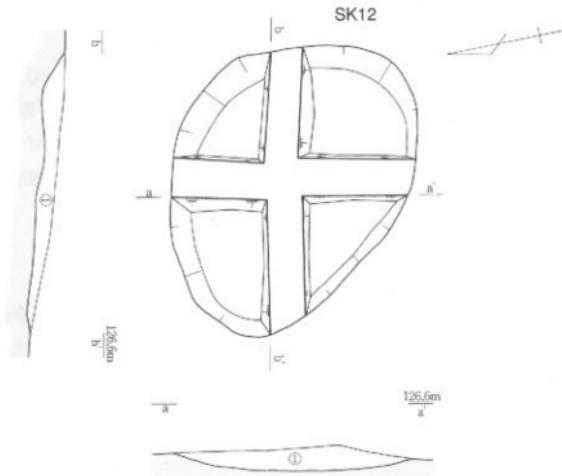
#### 〔S K16〕（第14図）

調査区の北西隅で検出され、S D 3を切って掘削されている。遺構の平面形は円形で規模は長軸0.57m、短軸0.60m、深さ0.30mを測る。主軸方向はN—23°—Wである。

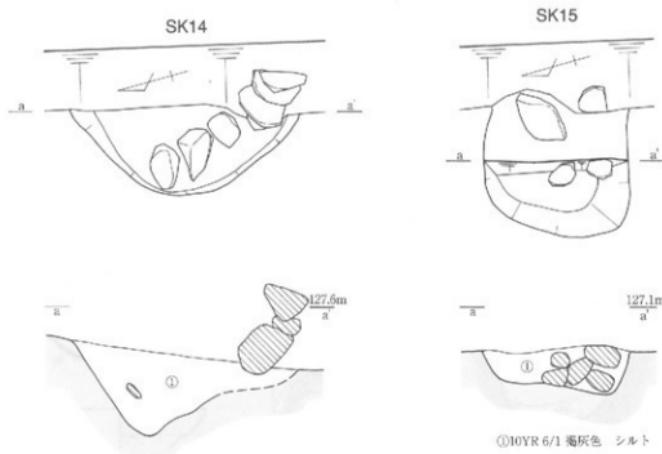


第23図 S K13遺構実測図(1/20)

第24図 S K13出土遺物実測図



① 10YR 6/2 灰黄褐色 粗砂混じりシルト



① 10YR 2/3 黒褐色 粗砂混じり粘土

0 1m

第25図 S K 12・14・15遺構実測図(1/20)

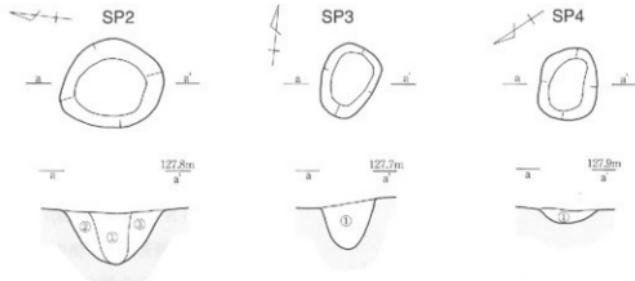
遺物は土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。

#### (4) 柱穴

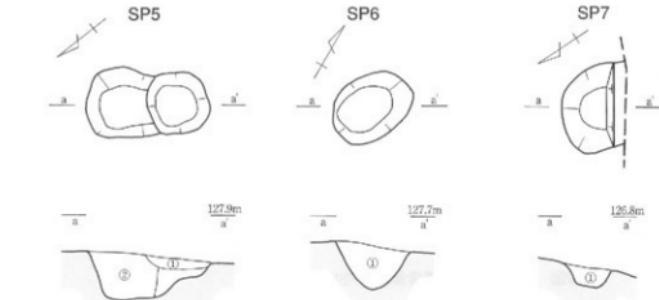
〔S P 2〕(第26図、図版4)

調査区の北端、S K 7の北側で検出された。遺構の平面形はほぼ円形で、規模は長軸0.39m、短軸0.36m、深さ0.20mを測る。断面から柱痕が確認できた。

遺物は瓦器塊が出土したが、細片のため図化できなかった。



- ① 10YR 6/1 黒灰色 砂混じりシルト  
 ② 10YR 6/1 黒灰色 砂混じりシルト  
 (2.5YR 7/8 棕色、粘土ブロックを少量含む)  
 ③ 10YR 5/4 に黒褐色、粘土



- ① 10YR 6/1 黒灰色 砂混じりシルト  
 ② 10YR 6/1 黒灰色 砂混じりシルト  
 (10YR 8/1 底白色、粘土ブロックを少量含む)



第26図 S P 2・3・4・5・6・7 遺構実測図(1/20)

[S P 3] (第26図)

調査区の北側中央部、SK7の南側で検出された。遺構の平面形は隅丸方形で、規模は長軸0.30m、短軸0.22m、深さ0.20mを測る。

遺物は瓦器塊、瓦器皿、土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S P 4] (第26図)

調査区の北東部、SK7の東側で検出された。遺構の平面形は隅丸方形で、規模は長軸0.30m、短軸0.24m、深さ0.05mを測る。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S P 5] (第26図)

調査区の北東部、P3の西で検出された。遺構の平面形は隅丸方形で、南側は別のピットに切られている。規模は残存長軸0.25m、短軸0.25m、深さ0.25mを測る。

遺物は瓦器塊が出土したが、細片のため図化できなかった。

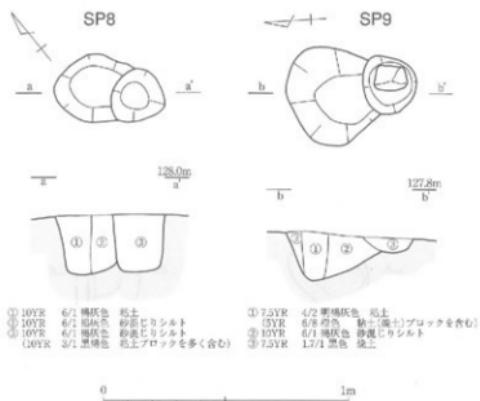
[S P 6] (第26図)

調査区の東側中央部、SK10の北側で検出された。遺構の平面形は楕円形で、規模は長軸0.35m、短軸0.26m、深さ0.18mを測る。

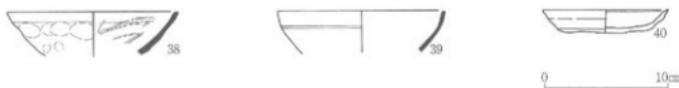
遺物は出土しなかった。

[S P 7] (第26図)

調査区の中央部西よりで検出された。南半分が搅乱で切られているため、遺構の平面形は不明であるが、規模は長軸0.37m、残存短



第27図 S P 8 + 9 遺構実測図(1/20)



第28図 S P 8 出土遺物実測図



第29図 包含層出土遺物実測図

軸0.23m、深さ0.08mを測る。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

#### [ S P 8 ] (第27・28図、図版12・16)

調査区の北東部、P 3 の東で検出された。遺構の平面形は梢円形で、南側は別のピットに切られている。規模は残存長軸0.22m、短軸0.27m、深さ0.25mを測る。断面から柱痕が確認できた。

遺物は瓦器塊（38・39）、土師質皿（40）が出土した。瓦器塊（39）は口縁外面に1条の沈線をめぐらす。

#### [ S P 9 ] (第27図)

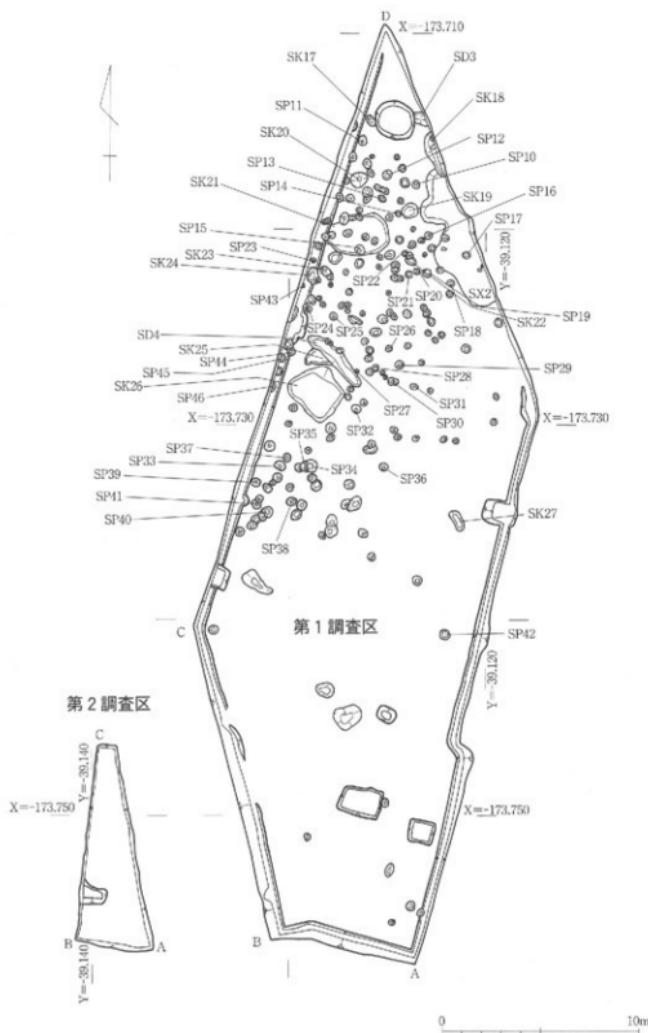
調査区の中央部東寄りで検出された。遺構の平面形は不定形で、南側は別のピットに切られている。規模は残存長軸0.32m、短軸0.40m、深さ0.20mを測る。断面から柱痕が確認できた。埋土には焼土が多く含まれていた。

遺物は瓦器塊、土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

#### (4) 包含層 (第29図、図版11・12・16・17)

包含層からは須恵器壺蓋（41・42）、土師質皿（45・48）、瓦器皿（44・46・47・49）、小型瓦質片口（43）、瓦器塊（50～60）、土師質羽釜（61）、瓦質甕（62）が出土した。須恵器壺蓋（41・42）は天井部の明瞭な稜線を失っており陶邑編年II型式4段階に相当すると思われる。瓦器塊（55）は内外面ともに密にヘラミガキを施し、断面方形の高台を貼り付けるなど古い様相を示す一方、（58～60）は外面にヘラミガキは見られず、内面のヘラミガキも粗雑であり、断面逆三角形の高台を貼り付けるなどや新しい様相を示し、瓦器塊は全体として尾上編年III-1～IV-1期に相当すると思われる。

### 第3節 M I N05-1



第30図 遺構配置図(1/250)

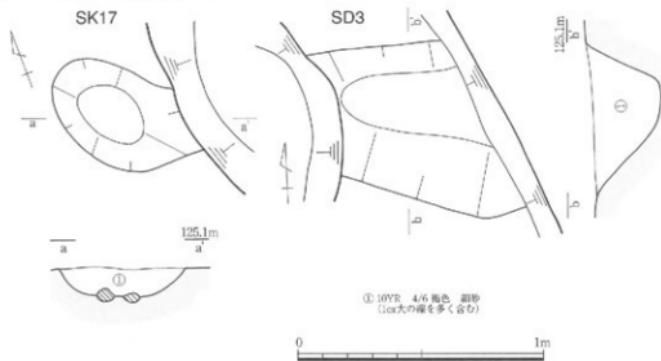
本調査では調査区を2ヶ所設定した。調査区の名称は掘削を進めた順に第1調査区・第2調査区とした。

#### 第1調査区

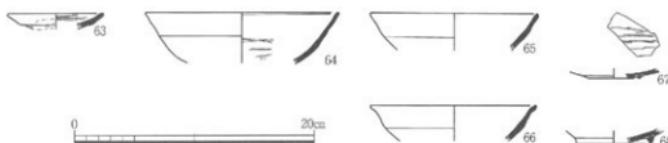
本調査区はM I N04-4・04-12調査区が立地する平坦面の一段下の面に位置し、調査区は長辺50m、短辺7.5mで設定した。北東部から南西部に向かって緩やかに傾斜し、北端と南端の比高差は1mを測る。調査区は調査以前、水田として利用されており、傾斜にあわせて3段の緩やかな段差がついていた。

層序は基本的に盛土、耕土、床土、包含層、遺構面、地山となるが、南に向かい深度が深くなるにつれ耕土、床土が互層をなし耕作面が複数存在した。これらの耕作面では明確な遺構が確認されなかつたため、包含層上面まで機械掘削し、包含層より人力掘削を行い、地面上で遺構検出を行なった。

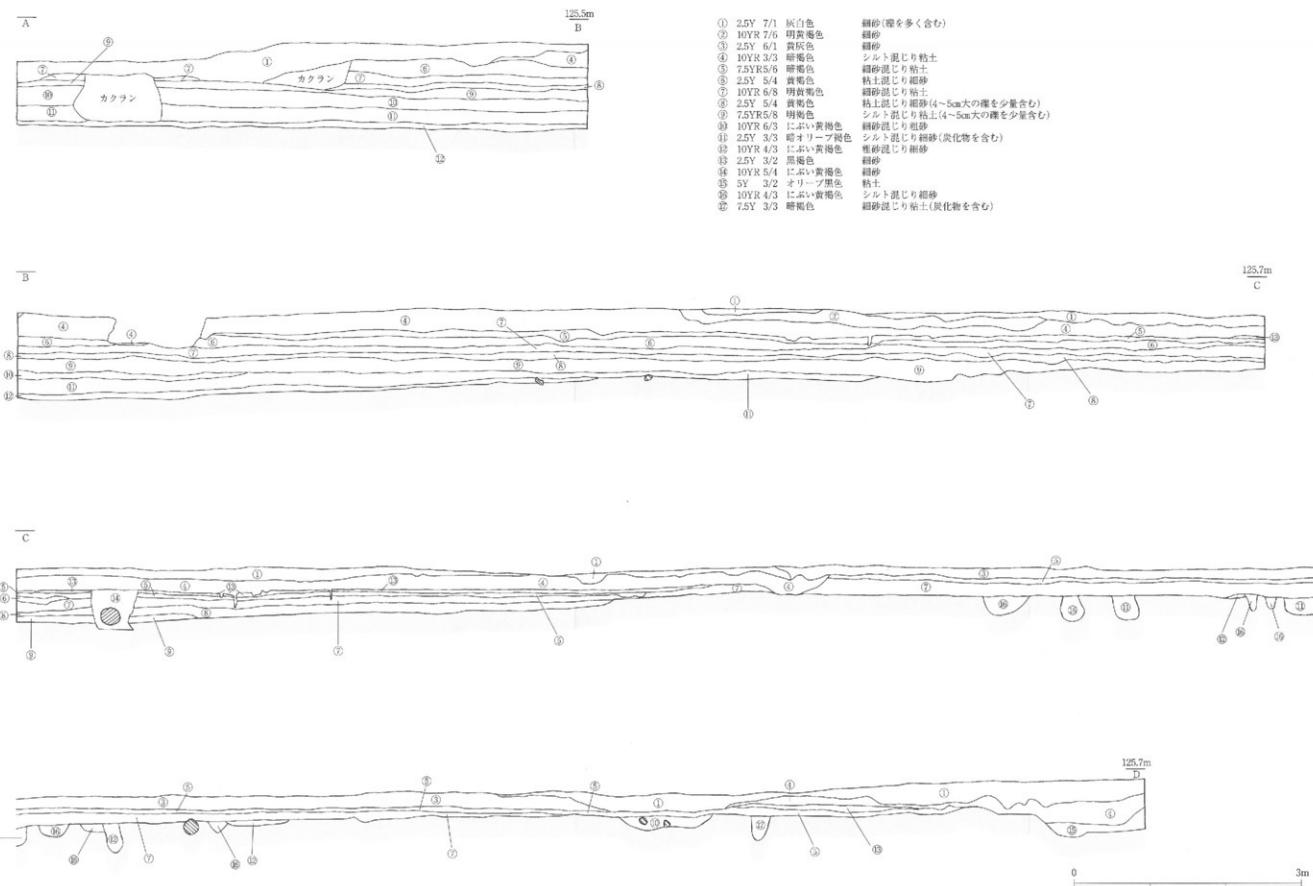
上述のとおり本調査区は北東部から南西部に向かって傾斜しており、比較的標高が高い北半部で多数のピットや土坑を検出したが、明確な建物の復元には至らなかつた。一方、南半部では遺構が希薄な上、現代の工場基礎による搅乱を受けるなど不明な点多く、北半部とは対照的な遺構分布であった。



第32図 SD3・SK17遺構実測図(1/20)



第33図 SD3・SK17出土遺物実測図



第31図 土層断面実測図(1/50)

### (1) 溝

[SD 3] (第32・33図、図版12)

調査区の北端東側で検出された。西端は搅乱に切られ、東端は調査区外へと延びていくため詳細は不明であるが、埋土が同じであることから西側のSK1と本来は同一遺構の可能性が高い。遺構の規模は検出長0.56m、幅0.54m、深さは0.30mを測る。検出方向はN-86°-Wである。

遺物は瓦器塊(64-68)、土師質皿が出土した。瓦器塊は内面に粗雑な暗文、外面には口縁部に強いヨコナデを施し、断面三角形の高台を貼り付けられている。尾上編年Ⅲ-2~3期に相当すると思われる。

[SD 4] (第34・35図、図版12)

調査区の中央部西より、SK26の北側で検出された。検出方向はN-19°-Eである。遺構の規模は長さ3.64m、幅0.72m、深さは中央部で0.20mを測るが、西に向かうにつれて浅くなり、断面形態も逆三角形から台形へと変化する。

遺物は瓦器皿(69)、瓦器塊(70・71)が出土した。

### (2) 土坑

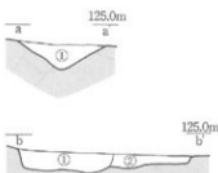
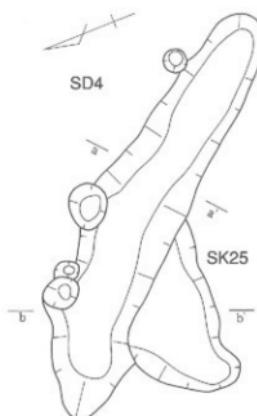
[SK17] (第32・33図、図版12)

調査区の北端西側で検出された。東側は搅乱に切られているため、遺構の平面形は不明であるが、上述のとおりSD3と本来は同一の遺構である可能性が高い。規模は残存長軸0.50m、短軸0.40m、深さは0.11mを測る。主軸方向はN-70°-Wである。

遺物は瓦器皿(63)、土師質土器が出土した。

[SK18] (第36・37図、図版12)

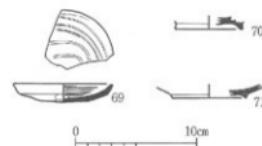
調査区の北端東側で検出された。東端は調査区外へと延びていくため詳細は不明であるが、遺構の規



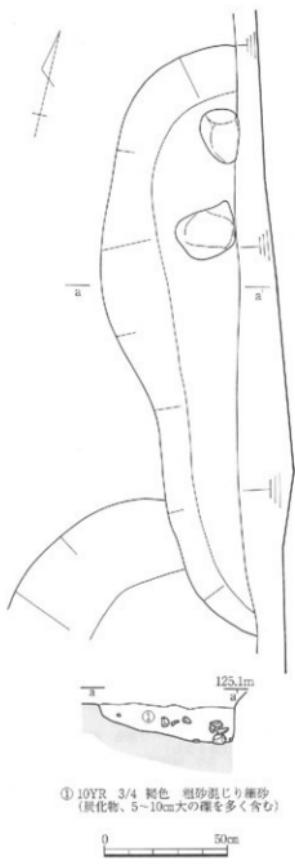
① 2.5Y 4/4 オリーブ褐色 細砂混じりシルト  
(炭化物を含む)  
② 2.5Y 5/2 暗灰黄色 シルト

0 2m

第34図 SD 4・SK 25遺構実測図(1/40)



第35図 SD 4 出土遺物実測図



第36図 S K18遺構実測図(1/20)

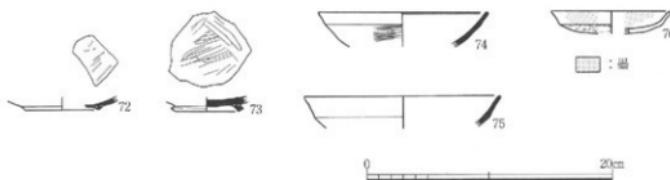
模は長軸2.42m、残存短軸0.55m、深さは0.15mを測る。埋土には5~10cm大の礫が多く含まれており、底には約20cm大の石があった。主軸方向はN-15°-Eである。

遺物は瓦器塊(72~75)、土師質皿(76)が出土した。瓦器塊(72・74・75)は尾上編年Ⅲ-2~3期に相当するが、(73)は見込みにヘラミガキを密に施し、断面方形の高台を貼り付けていることから他の瓦器塊より古い様相を呈しており、尾上編年Ⅲ-1~2期に相当すると思われる。また土師質皿(76)には内外面ともに墨が塗布されていた。

#### [S K19] (第38・39図、図版13)

調査区の北側、S X 2の西側で検出された。遺構の平面形は楕円形である。規模は長軸0.86m、短軸0.72m、深さは0.26mを測る。主軸方向はN-72°-Eである。

遺物はややまとまって出土しており、土師質皿(77~79)、中国製青磁皿(80)、瓦器塊(81~85)、須恵器が出土した。土師質皿(77~79)は口縁部が短く直立し、平底を有する。口縁外面にヨコナデ、底部にはユビオサエの跡が観察でき、内面はナデ調整が施されていた。中国製青磁皿(80)は口縁端部を上方へつまみ上げている。瓦器塊(81~85)は内面に粗雑な暗文、外面



第37図 S K18出土遺物実測図

には口縁部に強いヨコナデ、口縁下半部にはユビオサエの跡が観察でき、断面三角形の高台を貼り付けられている。尾上編年Ⅲ—2～3期に相当すると思われる。

[S K20] (第40・42図、図版13)

調査区の北端西側で検出された。遺構の平面形は不定円形である。規模は長軸0.87m、短軸0.80m、深さは0.23mを測る。主軸方向はN—70°—Eである。

遺物は須恵器坏身 (86) が出土した。

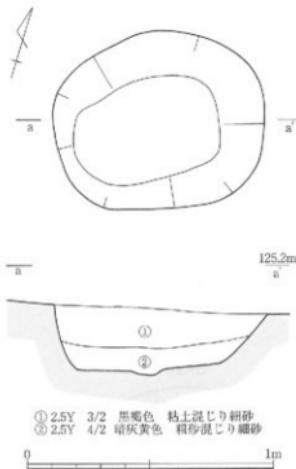
[S K21] (第41・42図、図版6・13)

調査区の北西部で検出された。遺構の平面形は梢円形であり、規模は長軸3.08m、短軸1.95mと大きいが、深さは東側がやや深いことを除けば全体的に0.08mと非常に浅く、すでに削平を受けている可能性が高い。埋土には焼土が含まれていた。主軸方向はN—72°—Eである。

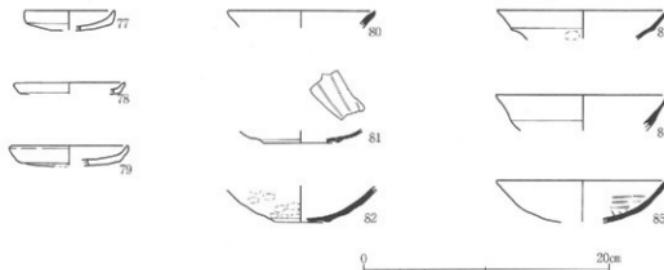
遺物は土師質壺 (87)、弥生土器 (88)、須恵器、瓦器塊、瓦器皿、土師質土器が出土した。弥生土器 (88) は沈線を1条施しており弥生中期の壺の体部と考えられる。

[S K22] (第40・42図、図版13)

調査区の北側中央、S K21とS X 2の間で検出された。遺構の平面形は梢



第38図 S K19遺構実測図(1/20)



第39図 S K19出土遺物実測図

円形であり、一部他のピットに切られている。規模は長軸0.59m、短軸0.37m、深さは0.17mを測る。主軸方向はN—72°—Wである。

遺物は瓦器塊（89）、土師器壺が出土した。

#### [SK23]

調査区の北西部、SK21の南側で検出された。遺構の平面形は梢円形であり、他のピットを切っている。規模は長軸0.56m、短軸0.43mを測り、深さは0.59mと平面規模に比して深い。埋土には焼土や炭が多く含まれていた。主軸方向はN—37°—Eである。

遺物は須恵器、瓦器、土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

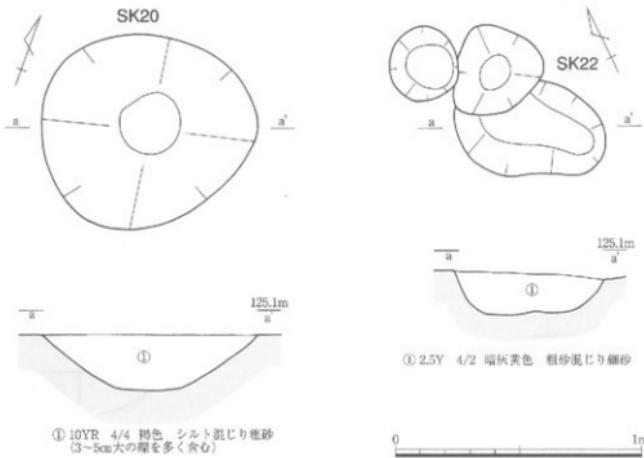
#### [SK24]（第42図、図版13）

調査区の北西部、SK23の西側で検出された。遺構の平面形は不定円形であり、南東角は別のピットに切られている。規模は長軸0.86m、短軸0.60m、深さは0.33mを測る。主軸方向はN—5°—Eである。

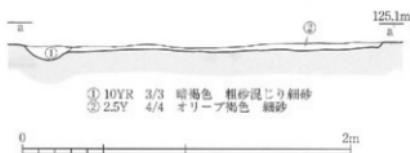
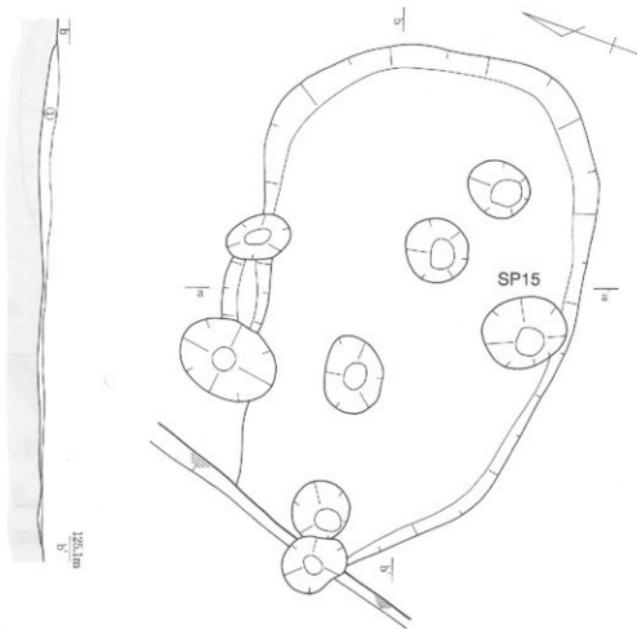
遺物は瓦器塊（90）、土師質壺が出土した。

#### [SK25]（第34図）

調査区の中央部西側で検出された。SD4に切られているため、遺構の平面形は不明である。規模は残存長軸1.00m、短軸0.90m、深さは0.10mを測る。主軸方向はN—19°—



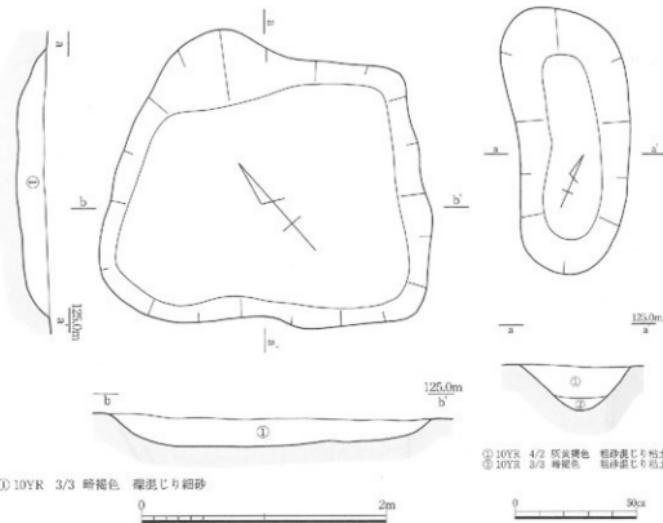
第40図 SK20・22遺構実測図(1/20)



第41図 S K 21遺構実測図(1/30)

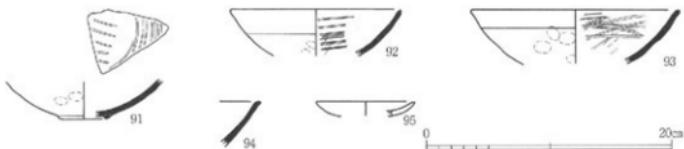


第42図 S K 20・21・22・24出土遺物実測図



第43図 SK 26遺構実測図(1/40)

第44図 SK 27遺構実測図(1/20)



第45図 SK 26・27出土遺物実測図

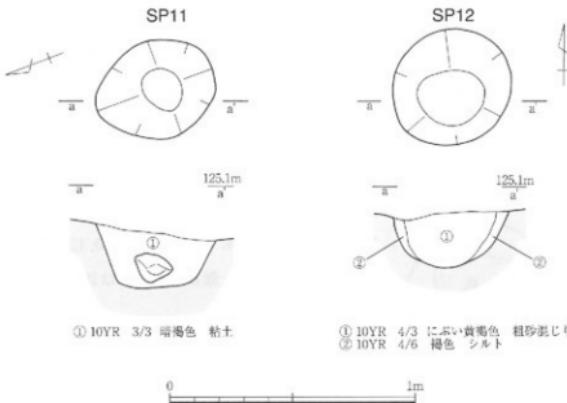
Eである。

遺物は土師質土器、瓦器が出土したが、細片のため図化できなかった。

#### [SK 26] (第43・45図、図版7・13)

調査区の中央部西側、SD 4・SK 25の南側で出された。遺構の平面形は隅丸方形である。規模は長軸2.64m、短軸2.18m、深さは0.24mを測る。主軸方向はN-45°-Wである。

遺物は瓦器塊(91~93)、中国製白磁碗(94)が出土した。瓦器塊(91~93)は内面に粗雑な暗文、外面には口縁部に強いヨコナデを施し、断面三角形の高台を貼り付けている。尾上編年Ⅲ-2~3期に相当すると思われる。中国製白磁碗(94)は口縁端部がわずかに外反する。



第46図 S P 11・12遺構実測図(1/20)

[S K 27] (第44・45図、図版13)

調査区の中央部東側で検出された。遺構の平面形は楕円形である。規模は長軸1.09m、短軸0.45m、深さは0.17mを測る。主軸方向はN-34°—Eである。

遺物は土師質皿(95)、瓦器塊が出土した。

(3) 柱穴

[S P 10]

調査区の北端東側で検出された。遺構の平面形は円形であり、規模は長軸0.39m、短軸0.35m、深さ0.10mを測る。埋土には炭が多く含まれていた。

遺物は瓦器が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S P 11] (第46・47図、図版13)

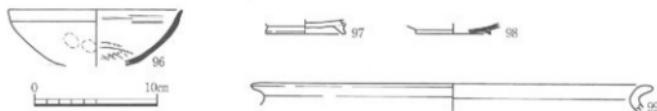
調査区の北端西側で検出された。遺構の平面形は円形であり、規模は長軸0.48m、短軸0.41m、深さ0.25mを測る。

遺物は瓦器塊(96)、土師質塊(97)が出土した。

[S P 12] (第46・47図、図版13)

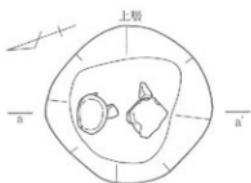
調査区の北端中央で検出された。遺構の平面形は円形であり、規模は長軸0.48m、短軸0.48m、深さ0.30mを測る。

遺物は瓦器塊(98)と土師質羽釜(99)が出土した。



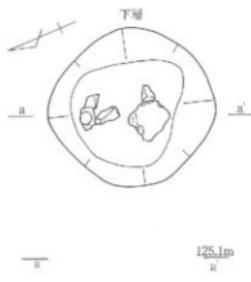
第47図 S P 11 · 12出土遺物実測図

[S P 13]



調査区の北端中央で検出された。遺構の平面形は椭円形であり、規模は長軸0.42m、短軸0.30m、深さ0.17mを測る。埋土には10cm大の焼土塊が含まれていた。

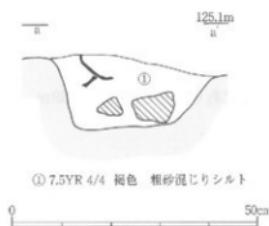
遺物は土師質皿が出土したが、細片のため図化できなかった。



[S P 14] (第48 · 49図、図版7 · 13 · 17)

調査区の北端中央、SK 19の西側で検出された。遺構の平面形は不定円形であり、規模は長軸0.34m、短軸0.32m、深さ0.15mを測る。底には8cm大の石が置かれていた。

遺物は完形の瓦器皿(100)と瓦器塊(101)が出土した。

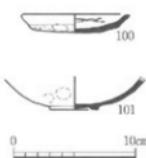


第48図 S P 14遺構実測図(1/10)

[S P 15]

調査区の北西部、SK 21の中で検出された。遺構の平面形は円形であり、規模は長軸0.46m、短軸0.51m、深さ0.34mを測る。埋土には炭が多く含まれていた。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

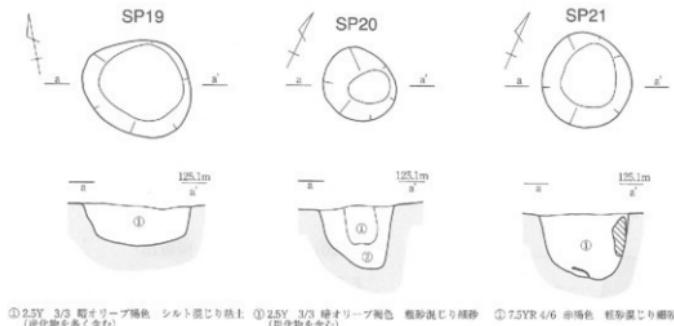
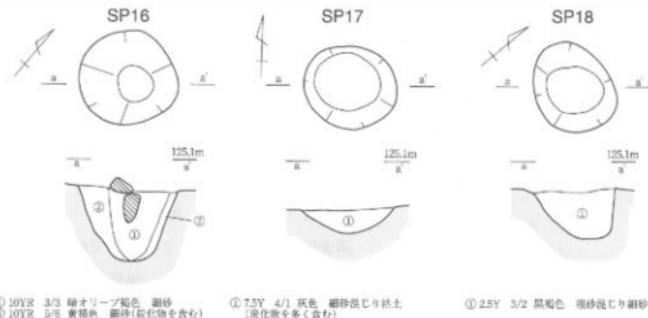


[S P 16] (第50 · 51図、図版13 · 17)

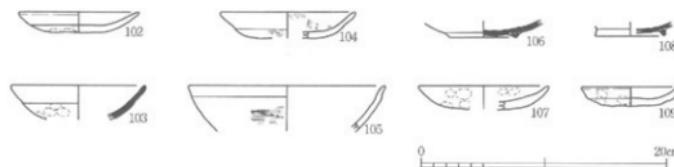
調査区の北東部、SX 2の西側で検出された。遺構の平面形は円形であり、規模は長軸0.40m、短軸0.38m、深さ0.30mを測る。

遺物は土師質皿(102)が出土した。

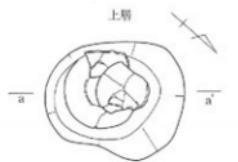
第49図 S P 14出土遺物実測図



第50図 S P 16・17・18・19・20・21遺構実測図(1/20)



第51図 S P 16・17・18・19・20・21出土遺物実測図



[S P 17] (第50・51図、図版13)

調査区の北東部、S X 2 の中で検出された。遺構の平面形は円形であり、規模は長軸0.38m、短軸0.34m、深さ0.09mを測る。

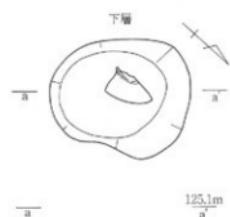
遺物は瓦器塊 (103) が出土した。



[S P 18] (第50・51図、図版13)

調査区の北東部、S X 2 の西側で検出された。遺構の平面形は円形であり、規模は長軸0.37m、短軸0.34m、深さ0.20mを測る。

遺物は土師質皿 (104) が出土した。



[S P 19] (第50・51図、図版13)

調査区の北東部、S X 2 の西側で検出された。遺構の平面形は円形であり、規模は長軸0.44m、短軸0.40m、深さ0.16mを測る。

遺物は土師質壺 (105)、土師質皿 (107) が出土した。



① 7.5YR 3/2 黒褐色 粗砂混じりシルト  
(炭化物を含む)

[S P 20] (第50・51図、図版13)

S P 19の西側で検出された。遺構の平面形は円形であり、規模は長軸0.30m、短軸0.30m、深さ0.27mを測る。断面から柱痕が確認できた。

遺物は瓦器塊 (106)、須恵器、土師質皿が出土した。

[S P 21] (第50・51図、図版13)

S P 20の西側で検出された。遺構の平面形は円



第52図 S P 22遺構実測図(1/10)

形であり、規模は長軸0.40m、短軸0.37m、深さ0.27mを測る。

遺物は瓦器塊（108）、土師質皿（109）、土師器高坏が出土した。

#### 〔S P 22〕（第52・53図、図版8・14・17）

調査区の北側中央で検出された。遺構の平面形は不定円形であり、規模は長軸0.28m、短軸0.24m、深さ0.29mを測る。土師質台付皿（111）を逆さにして置いた上に土師質皿（114）を載せ、さらにその上に土師質皿（110・112）を斜めに2枚載せていた。底部付近からも瓦器塊の破片（113）が伏せられた状態で出土した。遺物はその他に土師質皿（115）、須恵器が出土した。土師質台付皿（111）は内面にハケメを施し、外面にはユビオサエの跡が顕著に見られ、外側へ広がる高台をもつ。土師質皿（110）は口縁部外面にナデ調整を行ない、ユビオサエの跡が顕著に見られる平底の底部をもつ。瓦器塊（113）は内面にヘラミガキを施し、外面には口縁部にヨコナデ、底部にかけてユビオサエの跡が見られる。断面方形の高台をもち、尾上編年Ⅲ-1期に相当すると思われる。全体的に他の遺構の遺物に比べて古い様相を示す。

#### 〔S P 23〕（第54図、図版9）

西側側溝内で検出された。遺構の平面形は円形であり、規模は長軸0.23m、短軸0.21m、深さ0.06mを測る。側溝内で検出されたため上半部は削平されていたが、須恵器壺の破片を底に重ねて敷いていた。その他に瓦器塊、土師質皿が出土した。

#### 〔S P 24〕（第55・56図、図版14）

調査区中央の西側側溝肩部で検出された。遺構の平面形は不定円形であり、規模は長軸0.32m、短軸0.28m、深さ0.23mを測る。

遺物は土師質台付皿の脚部（116）、瓦器塊が出土した。

#### 〔S P 25〕（第55・56図、図版14）

S P 24の東側で検出された。遺構の平面形は円形であり、規模は長軸0.40m、短軸0.38



第54図 S P 23遺構実測図(1/10)

断面方形の高台をもち、尾上編年Ⅲ-1期に相当すると思われる。全体的に他の遺構の遺物

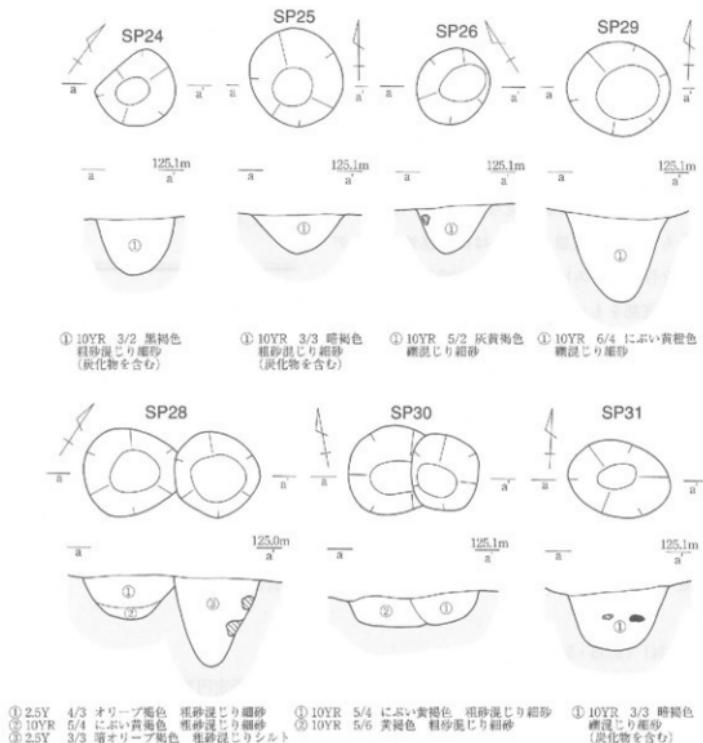
m、深さ0.16mを測る。

遺物は瓦器塊（117）、土師質壺が出土した。

〔S P 26〕（第55・56図、図版14）

調査区中央で検出された。遺構の平面形は円形であり、規模は長軸0.32m、短軸0.30m、深さ0.20mを測る。

遺物は瓦器皿（118）、中国製白磁碗（119）が出土した。中国製白磁碗（119）は内外面ともに施釉されているが、高台部は露胎である。



第55図 S P 24・25・26・28・29・30・31遺構実測図(1/20)

[S P 27] (第56図、図版14)

調査区中央西側、S D 4 の南東角で検出された。遺構の平面形は円形であり、規模は長軸、短軸とも0.05m、短軸0.30m、深さ0.14mを測る。

遺物は瓦器皿（120）が出土した。

[S P 28] (第55・56図、図版14)

S P 27の東側で検出された。遺構の平面形は円形であり、規模は長軸0.35m、深さ0.36mを測る。

遺物は瓦器皿（121）が出土した。

[S P 29] (第55・56図、図版14)

S P 28の東側で検出された。遺構の平面形は円形であり、規模は長軸0.42m、短軸0.38m、深さ0.35mを測る。

遺物は瓦器塊（122）、土師質皿が出土した。

[S P 30] (第55・56図、図版14)

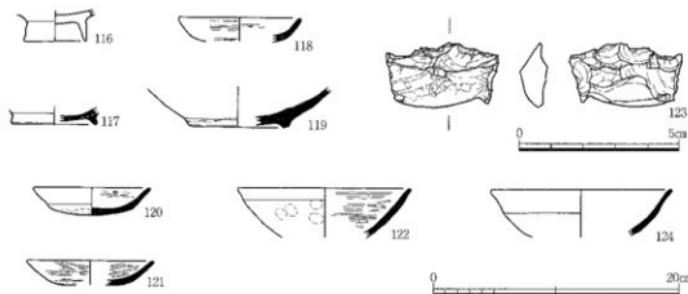
S P 29の南側で検出された。遺構の平面形は円形であり、規模は長軸0.31m、短軸0.28m、深さ0.12mを測る。

遺物はサヌカイト剥片（123）が出土した。

[S P 31] (第55・56図、図版14)

S P 30の東側で検出された。遺構の平面形は梢円形であり、規模は長軸0.41m、短軸0.32m、深さ0.25mを測る。

遺物は瓦器塊（124）、土師質土器が出土した。



第56図 S P 24・25・26・27・28・29・30・31出土遺物実測図

〔S P 32〕（第57・58図）

S K26の東側で検出された。遺構の平面形は楕円形であり、規模は長軸0.55m、短軸0.50m、深さ0.33mを測る。

遺物は出土しなかった。

〔S P 33〕（第57・58図、図版14）

調査区の西側で検出された。遺構の平面形は楕円形であり、規模は長軸0.56m、短軸0.48m、深さ0.32mを測る。

遺物は瓦器塊（125・126）、土師質皿が出土した。

〔S P 34〕（第57・58図、図版14）

調査区の西側で検出され、S P 35を切る。遺構の平面形は不定円形であり、規模は長軸0.67m、短軸0.52m、深さ0.36mを測る。

遺物は二次焼成を受け発泡化した瓦器塊（127）、土師質土器が出土した。

〔S P 35〕（第57・58図、図版14）

調査区の西側で検出され、S P 34に切られる。遺構の平面形は円形であり、規模は長軸0.56m、残存短軸0.40m、深さ0.38mを測る。

遺物は土師質塊（128）、土師器、瓦器塊が出土した。

〔S P 36〕（第57・58図、図版14）

調査区の中央部で検出された。遺構の平面形は円形であり、規模は長軸0.45m、短軸0.40m、深さ0.37mを測る。

遺物は土師質皿（129）、瓦器塊が出土した。

〔S P 37〕（第57・58図、図版14）

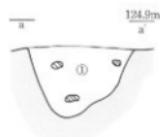
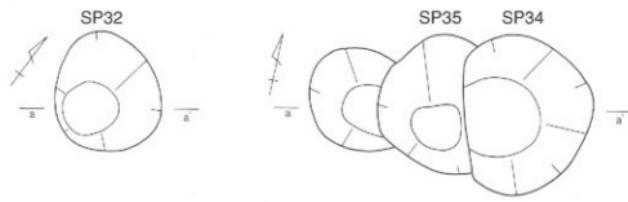
S P 33の北側で検出された。遺構の平面形は円形であり、規模は長軸0.40m、短軸0.37m、深さ0.34mを測る。

遺物は土師質皿（130）、瓦器塊が出土した。

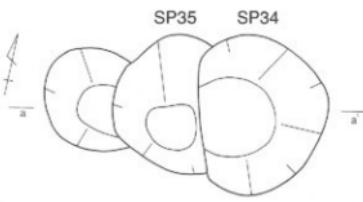
〔S P 38〕（第59図・60図、図版14）

調査区の中央西側、S P 35の南で検出された。遺構の平面形は楕円形であり、規模は長軸0.48m、短軸0.40m、深さ0.26mを測る。

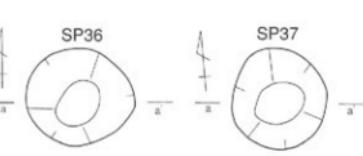
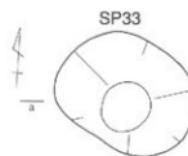
遺物は土師質塊（131）が出土した。



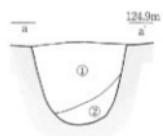
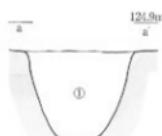
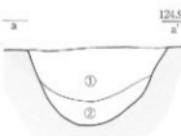
① 2.5Y 4/1 黄灰色 濃混じり細砂



① 10YR 5/4 にぶい黄褐色 粗砂混じりシルト  
② 2.5Y 3/2 黒褐色 シルト(炭化物を含む)  
③ 2.5Y 4/2 増灰黄色 細砂混じりシルト(炭化物を含む)  
④ 2.5Y 3/2 黒褐色 粘土混じり細砂



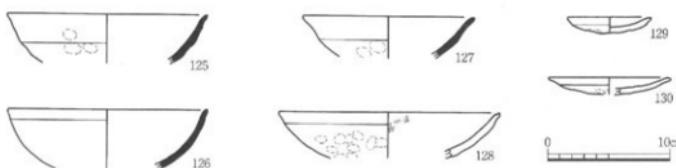
SP37



① 2.5Y 4/2 増灰黄色 粘土混じりシルト ② 10YR 3/4 増褐色粗砂混じりシルト ① 10YR 3/2 黑褐色 濃混じり細砂  
② 2.5Y 3/2 黑褐色 粘土混じり細砂 (炭化物を少量含む) ② 10YR 4/3 にぶい黄褐色 粗砂混じり細砂



第57図 S P 32・33・34・35・36・37遺構実測図(1/20)



第58図 S P 33・34・35・36・37出土遺物実測図

[S P 39] (第60図、図版14)

調査区の中央西側で検出された。遺構の平面形は椭円形であり、規模は長軸短軸ともに0.43m、深さ0.32mを測る。埋土には焼土が含まれていた。

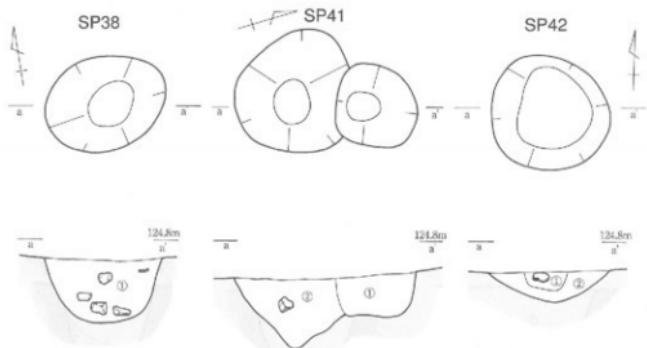
遺物は瓦器塊（132）、土師質土器が出土した。

[S P 40] (第60図、図版14)

調査区の中央西側で検出された。遺構の平面形は椭円形であり、規模は長軸0.50m、短軸0.46m、深さ0.10mを測る。

遺物は土師質皿（133）が出土した。

[S P 41] (第59・60図、図版14)



① 10YR 3/3 黄褐色 粘土混じりシルト (炭化物を含む) ② 2.5Y 3/3 植生オリーブ褐色 シルト (炭化物を含む) ③ 10YR 2/1 黒色 植生混じり粘土 (炭化物を非常に多く含む) ④ 2.5Y 5/4 くろい黄褐色 粘土混じり細砂  
⑤ 2.5Y 4/4 オリーブ褐色 シルト

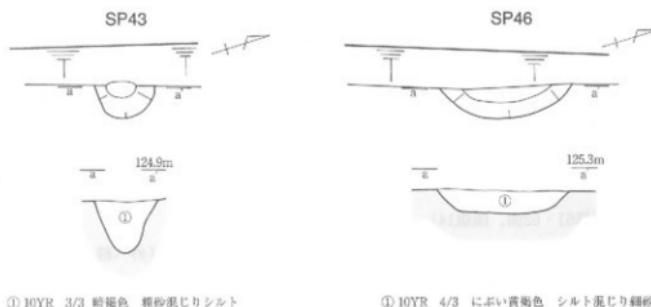
第59図 S P 38・41・42遺構実測図(1/20)



第60図 S P 38・39・40・41・42出土遺物実測図

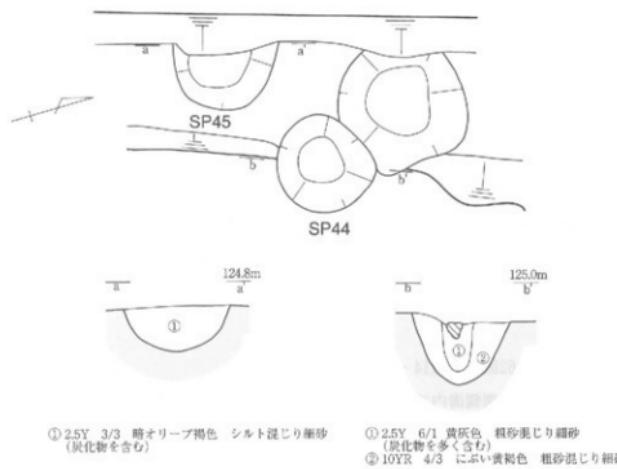
調査区の中央西側、S P 40の西側で検出された。遺構の平面形は不定円形であり、北側は別のピットに切られている。規模は長軸0.50m、残存短軸0.40m、深さ0.28mを測る。遺物は瓦器塊（134）が出土した。

〔S P 42〕（第59・60図、図版17）



① 10YR 3/3 暗褐色 粗砂混じりシルト

① 10YR 4/3 にぶい黄褐色 シルト混じり細砂

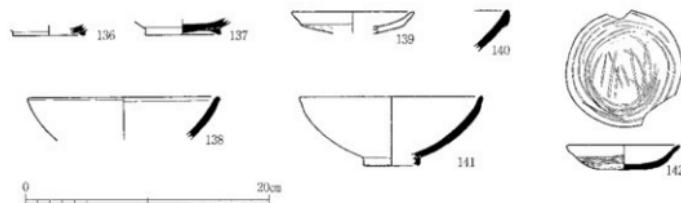


① 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色 シルト混じり細砂  
(炭化物を含む)

① 2.5Y 6/1 黄灰色 粗砂混じり細砂  
(炭化物を多く含む)  
② 10YR 4/3 にぶい黄褐色 粗砂混じり細砂



第61図 S P 43・44・45・46遺構実測図(1/20)



第62図 S P 43・44・45・46出土遺物実測図

調査区の中央東側で検出された。遺構の平面形は不定円形である。規模は長軸0.48m、残存短軸0.46m、深さ0.12mを測る。

遺物は土師質皿（135）、瓦器塊が出土した。

#### [S P 43] (第61・62図、図版14)

調査区中央付近の西側側溝内で検出された。遺構の平面形は調査区外へ続くため不明であるが、規模は残存長軸0.25m、残存短軸0.15m、深さ0.20mを測る。

遺物は瓦器塊（136）が出土した。

#### [S P 44] (第61・62図、図版14)

西側側溝底部、S K25の西側で検出された。遺構の平面形は円形であり、規模は長軸短軸とも0.40m、深さ0.25mを測る。断面から柱痕が確認できた。

遺物は瓦器塊（137・138）が出土した。

#### [S P 45] (第61・62図、図版14)

S P 44の南側、西側側溝内で検出された。遺構の平面形は調査区外へ続くため不明であるが、規模は残存長軸0.42m、残存短軸0.30m、深さ0.20mを測る。

遺物は土師質皿（139）、中国製白磁碗（140）、瓦器塊が出土した。中国製白磁碗（140）は正縁口縁を有し、内外面とも施釉されている。

#### [S P 46] (第61・62図、図版14・17)

S P 45の南側、西側側溝内で検出された。遺構の平面形は調査区外へ続くため不明であるが、規模は残存長軸0.53m、残存短軸0.13m、深さ0.10mを測る。

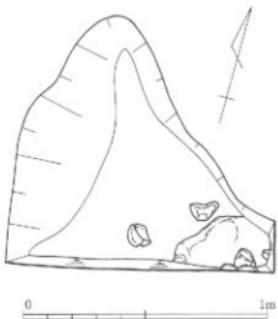
遺物は瓦器塊（141）、瓦器皿（142）、須恵器、土師質土器が出土した。

#### (4) その他

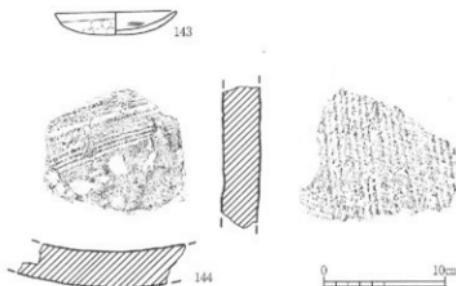
#### [S X 2] (第63・64図、図版9・15・17)

調査区の北西部で検出された。調査区外へと統くため詳細は不明であるが、遺構の規模は検出長7.42m、残存最大幅2.10mを測り、深さは北端でも0.13mと浅いが南に向かうにつれ更に浅くなる。また北端部では少量ではあるが常に水が湧いており、全体的に湿地のような状況を呈していた。また北接するSK18と同様に北端部の底では10cm大的の石が多く見られた。

遺物は土師質皿(143)、平瓦(144)、瓦器塊、土師質羽釜が出土した。平瓦(144)は凹面に布目痕が残り、凸面には縄タタキ痕が見られ、平安時代のものと考えられる。



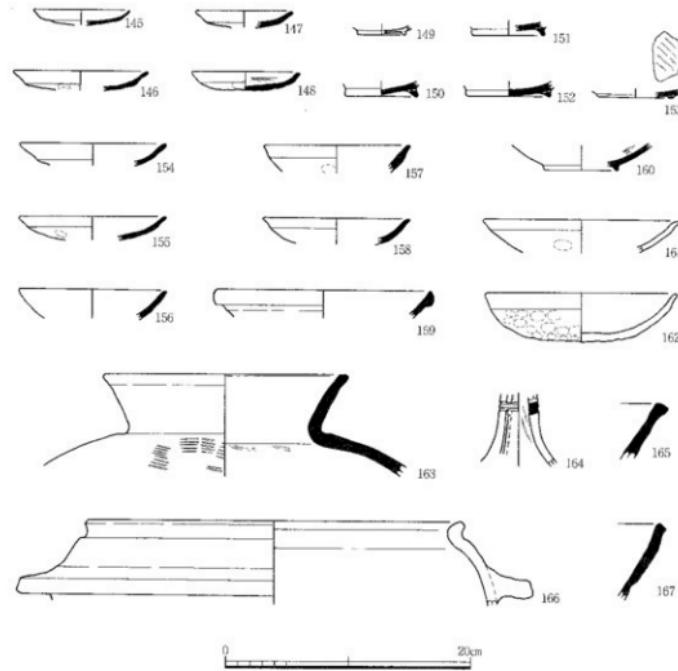
第63図 S X 2 遺物出土状況図(1/20)



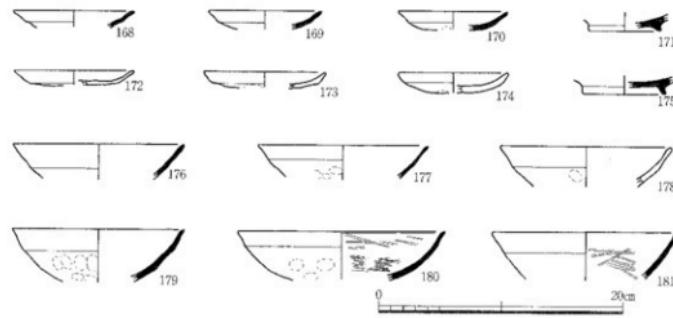
第64図 S X 2 出土遺物実測図

##### (5) 包含層 (第65・66図、図版15・17)

包含層からは瓦器皿(145～148・168～170)、瓦器塊(150～155・157・158・160・171・175～177・179～181)、土師質皿(162・172～174)、土師質塊(149・161・178)、中国製白磁碗(156・159)、須恵器壺(163)、須恵器高壺(164)、東播系須恵器練鉢(165・167)、土師質羽釜(166)が出土した。瓦器塊はいずれも内面に粗雑な暗文を施し、外面には口縁部にヨコナデを施し、口縁下半にユビオサエの跡が見られる。高台は断面逆三角形を呈し、尾上編年Ⅲ-2～3期に相当すると思われる。土師質皿(162)は外面には口縁部にヨコナデを施し、口縁下半にはユビオサエの跡が顕著に見られ、平底を呈す。中国製白磁碗(159)は内外面に施釉し玉縁口縁をもつ。



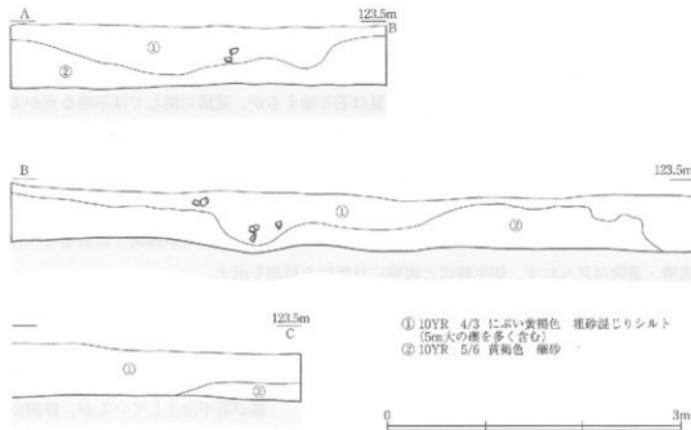
第65図 包含層出土遺物実測図①



第66図 包含層出土遺物実測図②

## 第2調査区

調査区は長辺10.0m、短辺3.8mで設定した。調査区は第1調査区の西側に位置し、第1調査区より一段低い段丘面上に立地し、第1調査区との比高は2mを測る。調査区は第1調査区が立地する段丘崖と南海電車三日市町駅駅舎に挟まれた狭小な調査区であったため、協議の結果、工事の安全を確保するため掘削はG L - 0.5mまでとなった。協議を受けて表土を機械掘削したところ、表土のみでG L - 0.5mに達し、造構面の検出には至らなかったため、調査区上層断面の観察と記録のみ行ない調査を終了した。



第67図 土層断面実測図(1/50)

## 第3章　まとめ

### 弥生時代

弥生時代の遺構は04-12調査区で検出された竪穴住居（S I 1）のみであり、遺物も弥生土器の破片が数点出土したのみである。この成果は30棟を越える竪穴住居と数千点の弥生土器が出土した三日市町駅西側の調査成果とは対照的である。また駅西側の調査では良好なものでは住居壁が約60cmも残り、遺物包含層に覆われていたことに対し、S I 1はほぼ床面を残すのみの状態で検出され、遺構の遺存状況も大きく異なっていた。その要因の一つとして今回の調査地と駅西側では線路に沿う形で比高差約4mの段丘崖が走っており、駅西側より一段高い面に立地する今回の調査地は後世に削平された可能性が高い。また今回の調査地はすぐ東側に丘陵がせまり、駅西側に比べ平坦面が極端に狭く、駅西側ほど積極的に利用されなかった可能性も考えられる。いずれにしても東側に丘陵が迫ることから今回の調査地が三日市北遺跡の弥生集落の東端であると考えられる。（第68図）

### 古墳時代

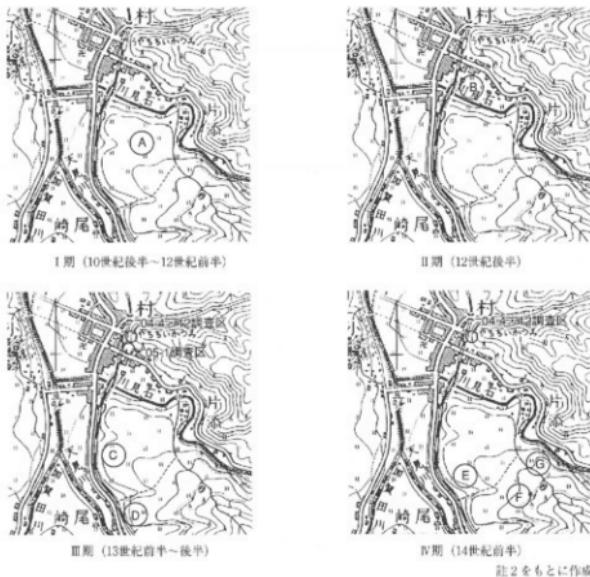
弥生時代に比べ須恵器など出土し遺物量は若干増えるが、遺構に関しては不明な点が多い。ただ今回の調査区の南に位置する三日市遺跡では中期の小型方墳や後期の横穴式石室が検出されていることから、04-4調査区で検出された溝（S D 1）は古墳の周溝の可能性もあるが、その性格は不明である。遺物は陶邑編年II型式3～4段階の須恵器が出土しているが、三日市遺跡で最も遺構が集中する時期と符号する。また駅西側では古墳時代の遺構・遺物は見られず、弥生時代と同様に対照的な様相を示す。



### 飛鳥・奈良～平安時代

飛鳥・奈良時代については須恵器が若干出土しているが、詳細は不明である。平安時代に関しては05-1調査区から平瓦が1点出土しているが、落ち込みからの出土であり他に同時期の遺物が見られないことから混入と思われる。また三日市遺跡では表裏面ともに同心円タタキが残る飛鳥・奈良時代の埴が1点出土しており、近辺に寺院の存在が想起される。

第68図 三日市北遺跡地形断面図(1/5000)



第69図 集落変遷模式図(1/20000)

### 中世

中世になると遺構・遺物の量が飛躍的に増え、多くの柱穴や土坑から集落の存在が看取される。ただ調査区によってピークを迎える時期が異なる。04-4調査区と04-12調査区では内面に粗雑な螺旋状暗文を施し、高台をもたない尾上編年IV-3期の瓦器塊が見られるが、05-1調査区ではIV-3期の瓦器塊は見られず、見込みに平行線状暗文を施し、断面逆三角形の高台を貼り付けたIII-2~3期の瓦器塊が主体となる。またS P22から出土した土師質台付皿も瓦器塊と時期的に合致し、04-4・04-12調査区よりやや古い様相を示す。

一方、第1章で先述したように今回の調査地に南接する三日市遺跡では平安時代末から近世にかけて集落の変遷が明らかになっており（註1・2）、この変遷に今回の調査成果を加え、以下集落の変遷を概観する。（第69図）

**I期** 当地域でまず集落が形成されるのはAグループであり、10世纪後半に出現する。石見川左岸の最も標高が低い段丘面上に立地し、グループ内で建物の変遷を経て瓦器塊出現以前の12世纪前半まで集落の主体となる。地山面の標高は約133~140mである。

**II期** 集落の中心は石見川の北岸のBグループへと移る。Aグループと同様に川沿いの最も標高が低い段丘面上に立地する。検出された建物は2棟のみであるがいずれも100m<sup>2</sup>前後の大型建物であり、時期としては黒色土器が出土していることから12世纪後半頃と考え

られている。地山面の標高は約124mである。

Ⅲ期 集落は北岸ではBグループ北側の04-4・04-12調査区、05-1調査区、南岸ではAグループ南側のC・Dグループへと展開する。いずれもA・Bグループが立地した面より一段高い段丘面に移り、地山面の標高は05-1調査区で約125m、C・Dグループでともに約139mである。05-1調査区では明確に建物を復元し得なかったが、無数の柱穴と出土した遺物にあまり時期幅が見られないことから、建物の建替えが頻繁に行われていたことが考えられる。一方対岸のC・Dグループでは周囲に溝をめぐらし構列をともなった大型の建物が出現する。時期的には見込みに平行線状暗文を施し、断面逆三角形の高台を貼り付けたⅢ-1～2期の瓦器塊が主体となることから13世紀前半～後半と思われる。

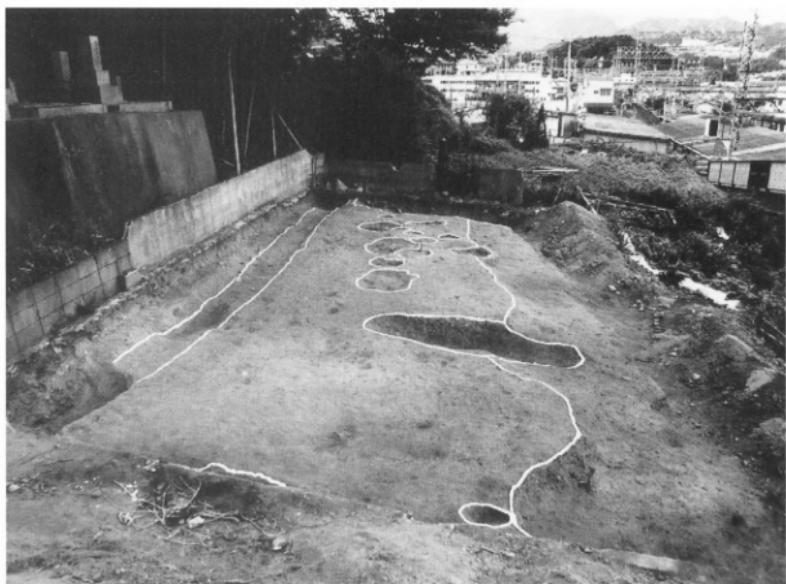
Ⅳ期 さらに段丘の上段へと開発は進み、北岸では05-1調査区から主体は04-4・04-12調査区へ移り、南岸ではE・F・Gグループが出現する。地山の標高は04-4・12調査区で約128m、Eグループで約141m、Fグループで約158m、Gグループで約155mである。南岸では最も遺構が集中する時期であり、また寺院と集落、さらに墳墓と思われる集石が配置され、ひとつの村落形態を示す。時期的には内面に粗雑な螺旋状暗文を施し、高台をもたない尾上編年Ⅳ-2～4期の瓦器塊が主体を占め、14世紀前半と思われる。

このように石見川の両岸において標高の低い段丘から次第に標高が高い段丘へと開発が進む様相が看取される。北岸では04-4・04-12調査区の背後に丘陵が迫るため、この段階で開発は終わるが、南岸ではさらに近世にかけて水利施設や瓦窯、墳墓などが検出され、連綿と人々の暮らしが続いている。今回の調査結果は三日市遺跡で明らかにされた石見川下流域の段丘開発過程と顕著をきたすものではなく、低所から高所へ両岸同時に開発が行なわれたと推察される。

#### 註

- 1)『三日市遺跡発掘調査報告書Ⅰ』(1988) 三日市遺跡調査会
- 2)『三日市遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(1988) 三日市遺跡調査会

# 図 版



全景（北から）



南部分（東から）



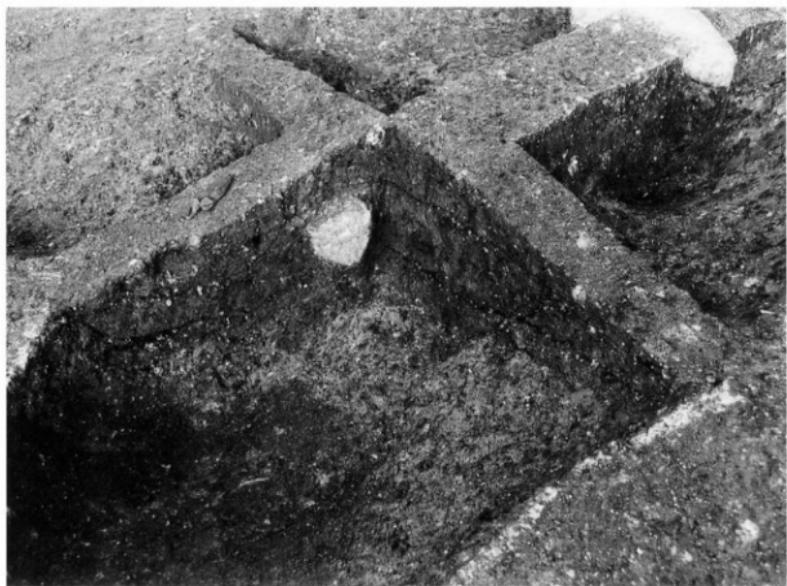
S K 6 (西から)



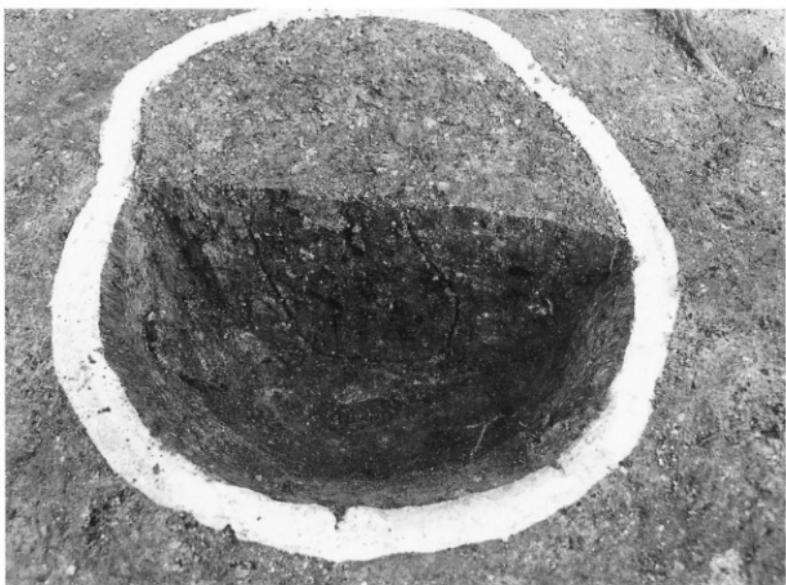
作業風景



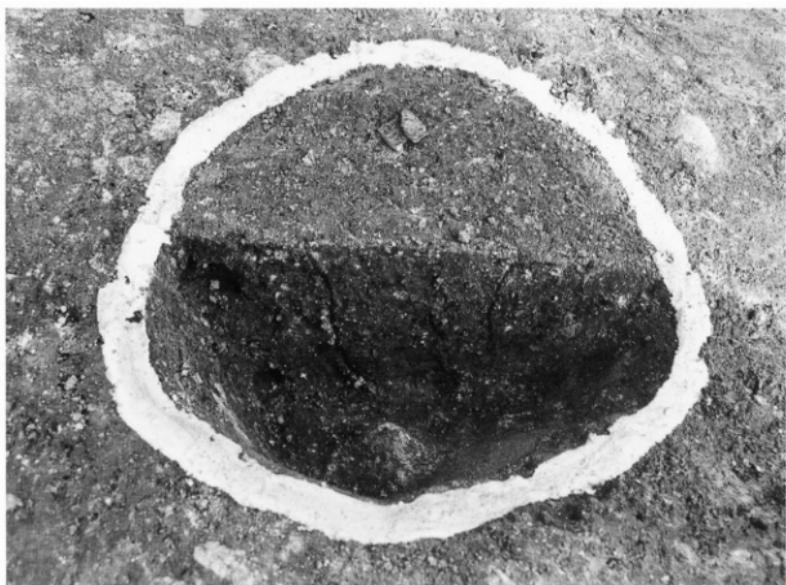
全景（北から）



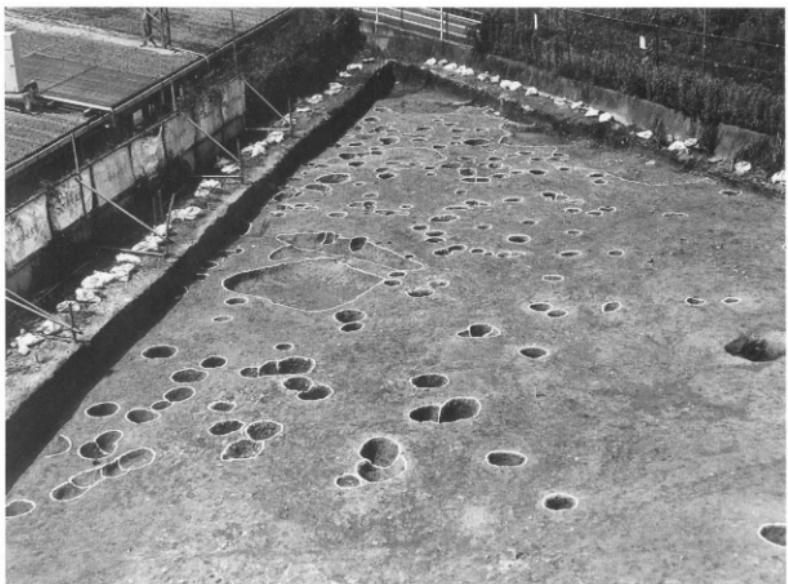
SK 9（西から）



S B 1 内 P 1 (南から)



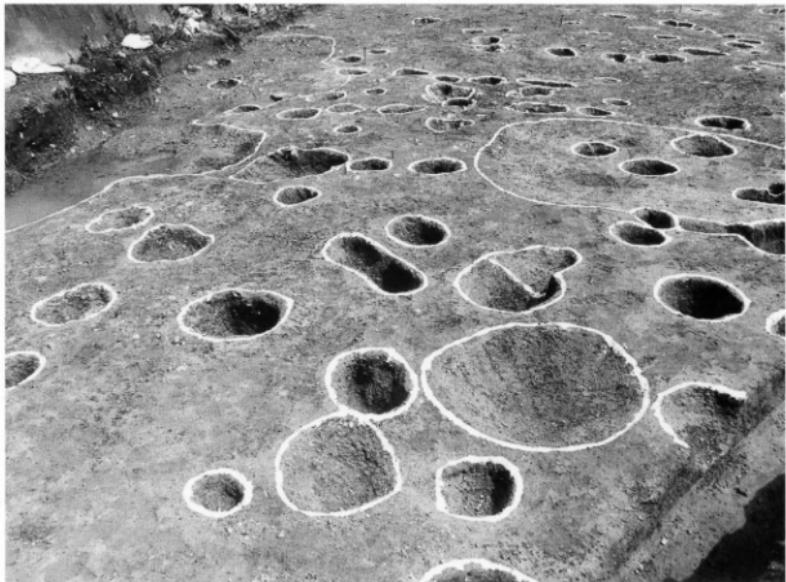
S P 2 (西から)



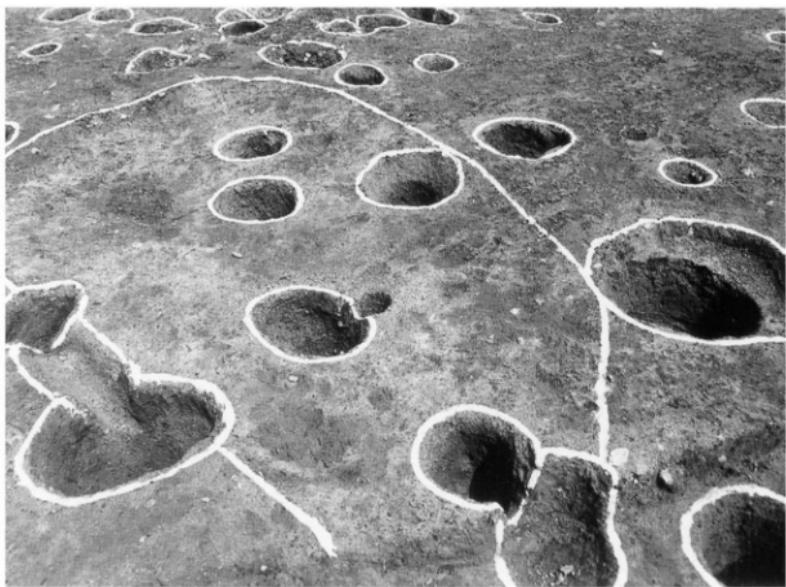
第1調査区 北部分（南から）



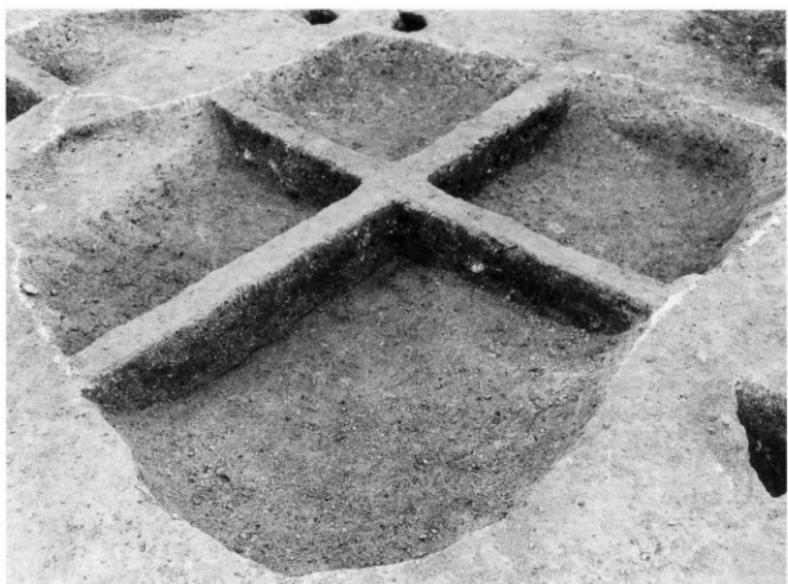
第1調査区 南部分（北から）



第1調査区 北半部 柱穴群（北から）



SK21（西から）



S K 26 (北から)



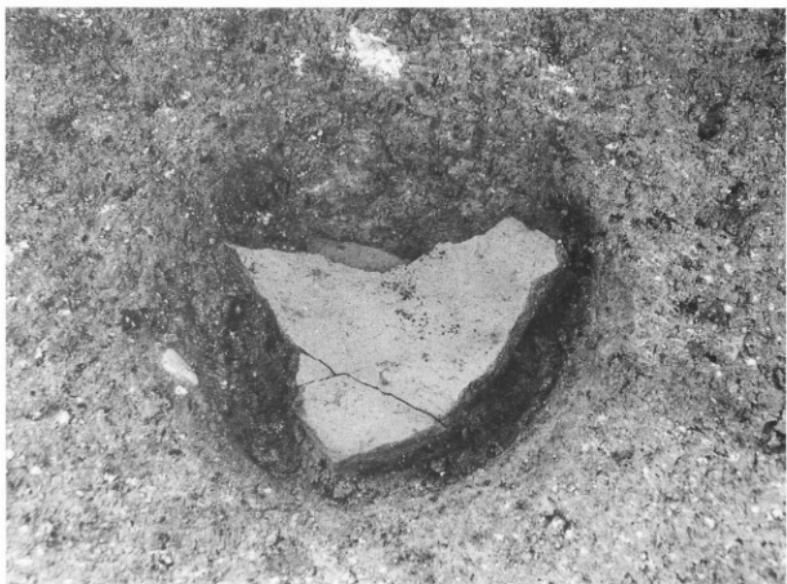
S P 14 (西から)



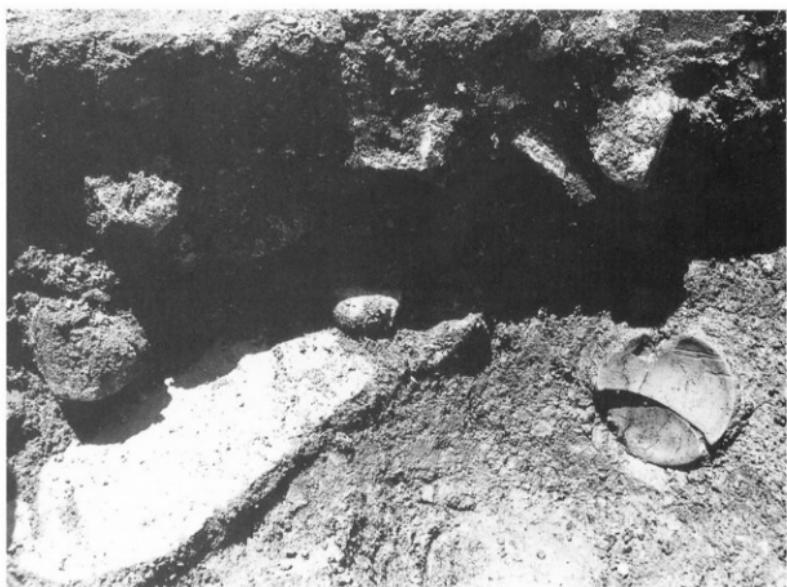
S P 22 (上層) (東から)



S P 22 (中層) (東から)



S P 23 (南から)



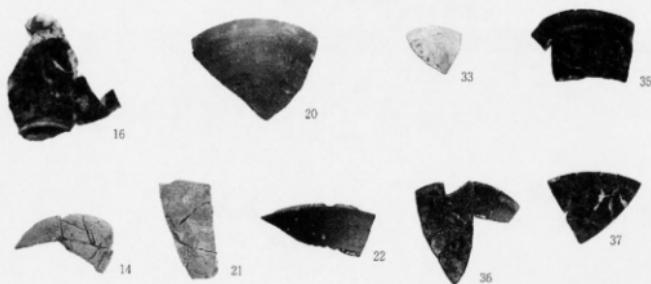
S X 2 遺物出土状況 (北から)



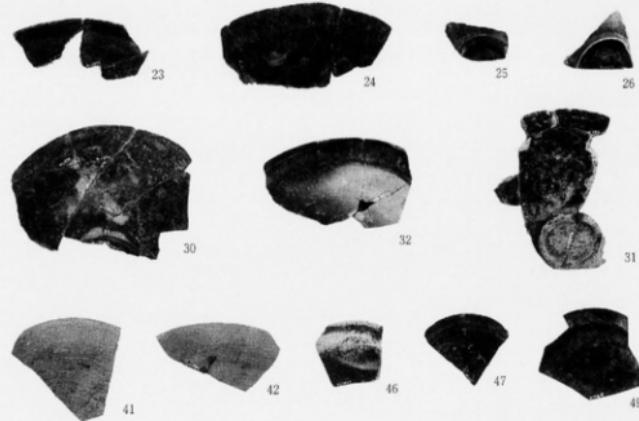
第2調査区 全景（西から）



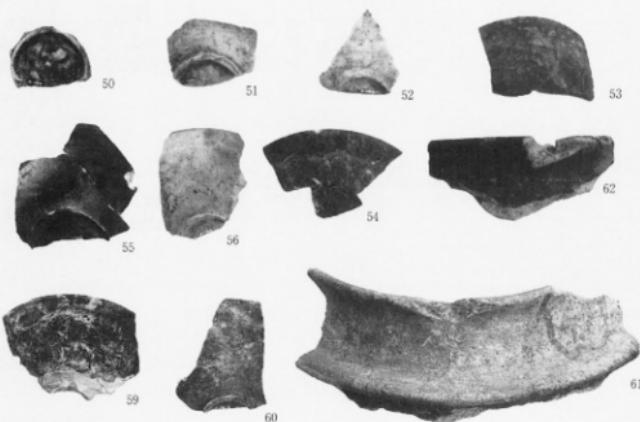
S X 1 (2 ~ 13)



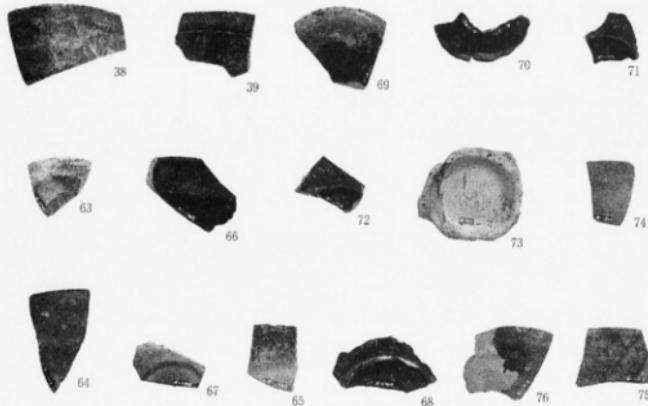
S B 1 (16·14)、S K 8 (20·21)、S K 9 (22)、S K13 (33·35~37)



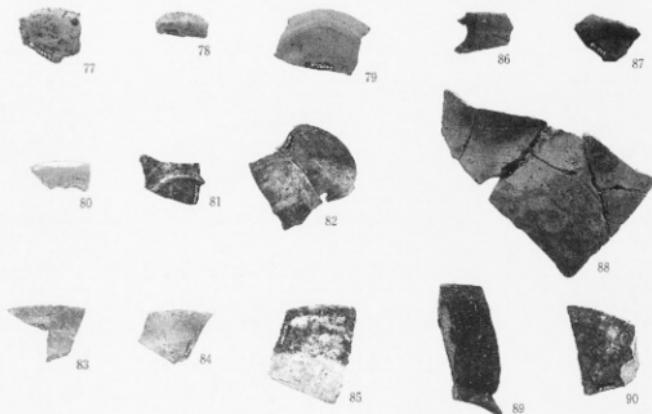
S K10 (23~26·30~32)、包含層 (41·42·46·47·49)



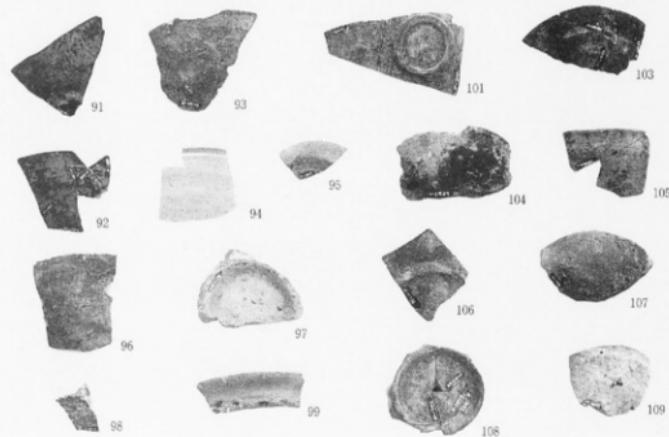
包含層 (50~56 · 59~62)



S P 8 (38·39)、S K17 (63)、S D 3 (64~68)、S D 4 (69~71)、S K18 (72~76)

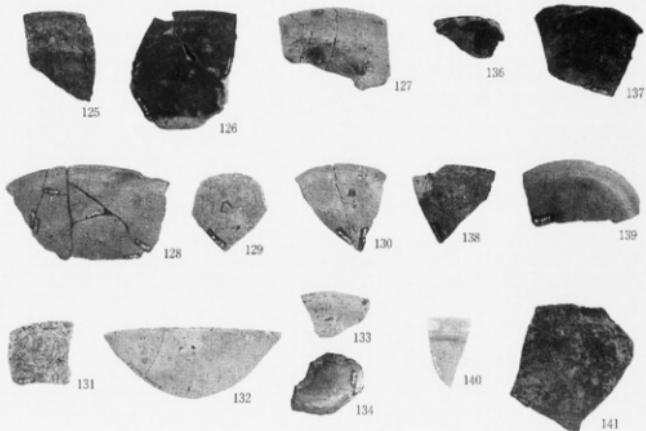


S K19 (77~85)、S K20 (86)、S K21 (87·88)、S K22 (89)、S K24 (90)

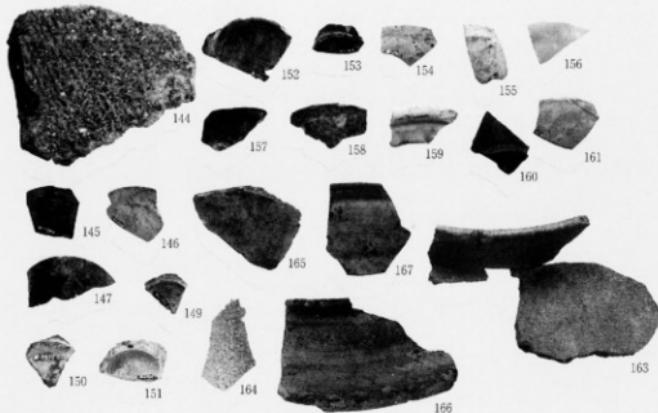
S K26 (91~94)、S K27 (95)、S P11 (96·97)、S P12 (98·99)、S P14 (101)、S P17 (103)、  
S P18 (104)、S P19 (105·107)、S P20 (106)、S P21 (108·109)



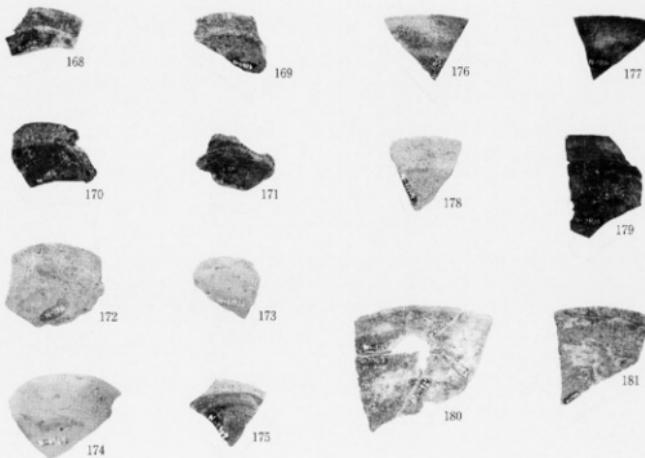
S P 22 (112・113・115)、S P 24 (116)、S P 25 (117)、S P 26 (118・119)、S P 27 (120)、  
S P 28 (121)、S P 29 (122)、S P 30 (123)、S P 31 (124)



S P 33 (125・126)、S P 34 (127)、S P 35 (128)、S P 36 (129)、S P 37 (130)、S P 38 (131)、  
S P 39 (132)、S P 40 (133)、S P 41 (134)、S P 43 (136)、S P 44 (137・138)、S P 45 (139・140)、  
S P 46 (141)



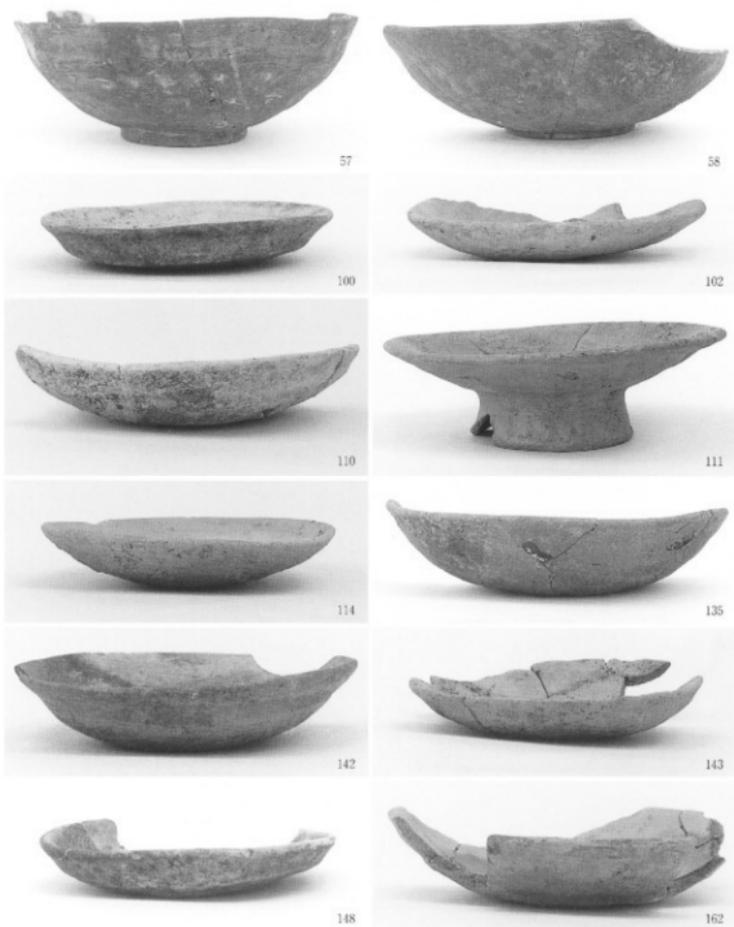
S X 2 (144)、包含層 (145~147·149~161·163~167)



包含層 (168~181)



S K 6 (1)、S B 1 (15)、S K 7 (17~19)、S K 10 (27~29)、S K 13 (34)、S P 8 (40)、  
包含層 (43~45·48)



包含層（57・58）、S P14（100）、S P16（102）、S P22（110・111・114）、S P42（135）、  
S P46（142）、S X2（143）、包含層①（148・162）

## 報告書抄録

ふりがな	みっかいちきたいせき
書名	三日市北遺跡Ⅱ
副書名	河内長野市埋蔵文化財調査報告書XXIII
シリーズ名	河内長野市文化財調査報告書
シリーズ番号	第43輯
編集者名	太田宏明 小林和美
編集機関	河内長野市教育委員会
所在地	〒586-8501 大阪府河内長野市原町一丁目1番1号 TEL0721-53-1111
発行年月日	2006年3月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
三日市北遺跡	大阪府河内長野市三日市町	27216	府171 河141	34° 26° 01°	135° 34° 28°	H16.7.16 H18.3.31	約80m <sup>2</sup>	道路整備
				34° 25° 59°	135° 34° 28°	H17.1.13 ~ H17.3.25	約160m <sup>2</sup>	道路整備
				34° 25° 58°	135° 34° 27°	H17.5.6 ~ H17.6.30	約500m <sup>2</sup>	道路整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三日市北遺跡 三日市宿跡 高野街道 (MIN04-4)	集落	弥生～近世	堅穴住居 溝 土坑 柱穴	須恵器 瓦器 上師質土器 陶磁器	
三日市北遺跡 三日市宿跡 高野街道 (MIN04-12)	集落	弥生～近世	掘立柱建物 堅穴住居 溝 土坑 柱穴	須恵器 瓦器 上師質土器 丸質土器 陶磁器	
三日市北遺跡 三日市宿跡 高野街道 (MIN05-1)	集落	弥生～近世	溝 土坑 柱穴	弥生土器 須恵器 瓦器 上師質土器 丸質土器 陶磁器	

河内長野市文化財調査報告書第43輯  
河内長野市埋蔵文化財調査報告書 XXIII

## 三日市北遺跡Ⅱ

---

2006年3月31日発行

発行 大阪府河内長野市原町一丁目1番1号  
河内長野市教育委員会  
0721-53-1111  
印刷 (株) 近畿印刷センター

---

